

3759  
Dc8  
資料室

新定  
中等國語讀本  
落合直文編  
森林太郎補  
荻野由之  
卷二

41482  
教科書文庫  
4  
810  
41-1921  
200030  
1686

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

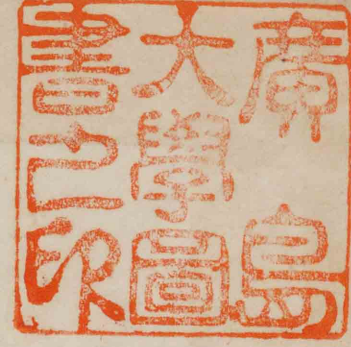
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
0c8

資料室



新中等國語讀本卷二目次

一、	伊勢參宮	.....	一
二、	日章旗	.....	五
三、	平家琵琶	.....	一一
四、	流泉啄木(新體詩)	.....	一四
五、	最後の授業その一	.....	一六
六、	最後の授業その二	.....	二二
七、	茶碗の茶	.....	二七
八、	遠慮(格言)	.....	三〇

目次

一

九、	近江聖人その一	三二
一〇、	近江聖人その二	三四
一一、	同情	四〇
一二、	兎狩	四五
一三、	喩言五則	五〇
一四、	東京	五三
一五、	桃の核	六〇
一六、	朝鮮雜觀その一	六四
一七、	朝鮮雜觀その二	七一
一八、	愚公の山	七八
一九、	一燈錢(書簡文)	八一

二〇、	わが幼時	八四
二一、	南洲遺訓	九二
二二、	初度の歐洲行	九五
二三、	布哇小景	一〇三
二四、	大海の日出	一〇七
二五、	大海原(新體詩)	一一一
二六、	希臘神話	一一五
二七、	佐久間大尉	一二二
二八、	三英雄の死生觀	一二九
二九、	史傳を讀むべし(書簡文)	一三二
三〇、	直江兼續	一三六

三一、	運命その一	一四〇
三二、	運命その二	一四八
三三、	機智縦横	一五二
一、	百人一首の對句	一五二
二、	頼春水の羽織	一五三
三、	姨捨山の月	一五四
三四、	京都の春	一五五
三五、	杉の戸(今様)	一六〇
三六、	時	一六二
三七、	安宅	一六七

卷二目次終



新定中等國語讀本卷二

一、伊勢參宮

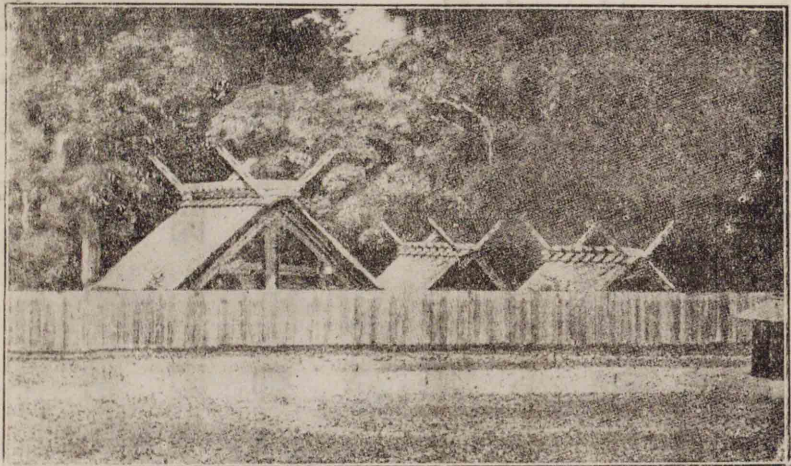
山田  
伊勢國度會  
郡。

俄に、參宮を思ひ立ちて、只今、山田に著きぬ。まづ、外宮を拜みて、次に、内宮を拜む。殊に、内宮の畏さは、言語に絶えたり。水底の小魚の數もよまるる、五十鈴川の、清き流に、心を洗ひ、名も知らぬ鳥の、奥深く啼く音に、耳を澄し、つつ、緑青色の苔にさびたる神杉の、太き幹の、天を支ふる柱の如くに立ち並べる間を辿りて、暫

かつをぎ  
(堅魚木)

かたじけな  
さに云云  
西行法師の歌  
に「何事のお  
はしますかは  
知られどもか  
たじけなさに  
涙こぼるる。」

く往けば、木立の奥、屏の彼方に、千木堅魚木の金色な  
るが拜まる。進みて、屏の内に入れば、正面の御門には、  
白布の垂幕、長く地に曳きて、靜に、そよ風に搖られ、そ  
の奥にまばらに立てる神杉に護られて、白砂の、一面  
に敷きつめられたる間に、神神しき白木の御宮拜ま  
れ給ふ。まづ、白幕の手前の石段の下に跪きて、小さき祈  
を捧げぬ。さて、傍に並びゐたる老爺老婆が、拍手を打  
ちては、溜息まじりに、高聲の祈願を繰り返すを聞き  
ながら、心には、西行法師が、かたじけなさに、涙をこぼ  
して額づきし、敬虔なる姿を思ひ浮べつ。



伊勢神宮

折しも聞ゆる笙、筆策の  
幽寂なる雅樂の音に送ら  
れて、この神境を辭し、顧み  
顧み、宇治橋を渡る。  
神路山の御陰をうつし、  
御裳濯川の、剩れる水を受  
け、いるる水田の間の道を、  
車に搖られながら、この神  
境が、大神の大御心に叶ひ  
し故由を考ふるに、大神宮

儀式帳に、

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢、鞆の音聞かぬ國と、大御意鎮ります國と悦びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるを見れば、第一には、山水の景色の類なきを愛でさせ給ひしならん、第二には、地勢、氣候、風土のうるはしさを愛でさせ給ひしならん、第三には、この土地に、永久なる平和の可能性のある事をめでさせ給ひしならん、最後には、皇御孫に率ゐらるる大和民族の

朝熊山  
伊勢國度會  
郡。

積極的發展を見そなはさんに都合よき、氣の落ちつく境と思はせ給ひしならんなど思ひふける中に、車はいつか、志摩境の名山朝熊山の麓につきぬ。五十嵐カ―我が書翰

二、日章旗

日章旗はわが大日本帝國の國旗であります。諸外國の國旗に、それぞれ、大切な意味が含まれて居るやうに、日本の國旗にも、深い意味があるのであります。私は、今、わが日章旗を、色の上からと、地理の上からと、

うへ(上)

祭祀といふことの上からと、國體の上からとに分けて、御話致さうと思ひます。

まづ、色の上からいへば、全體、色そのものはただ、赤いのが赤く、黒いのが黒いまでで、何といつて、別段、意味のあるのではありますまい。しかし、その色を見る人には、種種の感じを起させて、それが、色の意味のやうに思はれるものであります。さうして、その感じは、人人によつて、いくらかの相違はあるにしても、大體において、は一致して居ります。

ゑがく

わが日章旗は、白地に、赤でゑがかれてあります。そ

の白色は、至つて、汚のない、清淨潔白の意味を表して、實に結構な色合であります。西洋では、これに、靜とか、平和とかいふ意味を寓せて居ります。困ることは、軍の時の降參旗もこの色であるが、これは、二心のないことを表すものらしいのです。赤色は、日本も、支那も、西洋も、皆おなじ意味をもたせて、誠を表します。赤心、丹心などいふ語もこれらの意味から出たのでせう。西洋ではまた、熱心といふ意味を、これにもたせて居ります。熱心の極は劇しくなり、そのつまり、あぶないといふことにもなるので、すべての警戒の標などに

も、赤色が用ゐられてあります。そこで、日本の國旗は、その熱心、その誠の塊であるから、いざ破裂」といふ曉は、ひどくあぶないものであるが、平和の白色で、これを包んで居るから、心配はないのです。しかし、外國人の仕向によつては、いつ破裂して、彼等を驚すかも知れませぬ。これ、全く、日本人の、きつい氣性を表した、好い標本ではありませぬか。

くらゐ(位)

地理上からいへば、日本は、東に位して居る、日の出づる國であります。日章旗は、この意味をも表して居ります。しかも、太陽が、東から出て、次第に、その光を、西

に及すやうに、東の勢力を、益西に及さうとする進取の氣性が籠つて見えます。

つぎに、祭祀上の事ですが、いづれの國の國旗も、みな祭祀の意味を含んで居ります。祭祀といふ語が、よく當つて居らぬなら、敬神といつても宜いのです。皇祖天照大神は、また、日の神と申します。その日の神の御影に象られたのは、知らず識らずの間に、神の御護があるやうな心持がして、國民の欽仰の念を強むるものと思ひます。

國體の上からいへば、わが日本は、上に、萬世一系の



天皇を戴いて、その天壤無窮であることは、恰も、太陽が、始もなく、終もなく、また、一つの缺點もなく真丸に耀いて居るやうなものであるから、これに優つた、よい章は、他に決してあるまいと信じます。

これは私一人の考であるが、つまり、日本の國旗はいかなる點からしても、いひぶんのない章と思ひます。どうか、この國旗の精神を、全國に普く及して、國民の愛國心を引き立て、日章旗の名譽を、海外へまでも耀したいと存じます。(松波仁一郎—講演筆記)

いひぶん

### 三、平家琵琶

下野國佐野の城主天徳寺了伯、ある時、琵琶法師を招きて、平家を語らすとて、哀なる事を聞きたしといへば、法師、心得候ふとて、佐佐木四郎高綱が宇治河先陣の段を語る。侍臣、みな髀をうち、掌を撫し、面白しと歡呼したり。然るに、ひとり、了伯は愴然として、落涙數行に及べり。さてまた、今一曲、前のごとく哀なることを聞きたしといへば、那須與一宗高が扇の的を語る。侍臣、益欣躍歡呼したるに、了伯、愈、流涕嗚咽して、仰ぐこと能はず。

天徳寺了伯

佐野修理大夫

と稱す。(二二

一八年—二二

六一年)

平家

平家物語の

略。十二卷。

佐佐木四郎

高綱

近江國佐佐木

莊の人。世世

源氏の郎等。

那須與一宗

高

下野國那須の

人。

曲終りて後、侍臣等、二曲俱に、勇壯なる事にて、哀なるかた、少しもなきに、君には、何とて、涙に咽ばせ給ふぞ」といふ。了伯長大息していはく、汝等、この曲を聽きて、唯歡喜するはたのもしからず、よくよく考へ見るべし。佐佐木高綱は頼朝より、舍弟の蒲冠者にも賜はず、寵臣の梶原景季にも賜はぬ、生唆を賜れるに非ずや。されば、そのかひもなく、この馬にて、宇治河の先陣せずして、人に、先を越されなば、必ず討死して、再び歸らじと思ひ定め、頼朝に暇乞して出でける、その志、哀ならぬ事かは。又、那須與一も、源氏の大軍の中より擇

頼朝  
(一八〇七年  
 一八五九年)  
 蒲冠者  
源範頼。一八五三年)  
 梶原景季  
源太と稱す。景時の子。一二八二年一八六〇年)

ばれて、唯一騎、馬を、海中に乗り入れ、敵身方、數萬の軍勢、鳴を鎮めて見物する、晴の場なるに、波動きて馬足定らず、的の扇は、船中にありて動搖す。若し射損じなば、身方の名折たるべく、何の面目ありて、天下の人を見んや。必ず、馬上に切腹すべし。この時の心を思へば、武士の道ほど哀なるものはなし。我は、常に、高綱、宗高が心にて、戰に臨むが故に、今、この曲を聞きて、兩人の心を思ひやりて、覺えず嗚咽せり。然るに、汝等、これを聽きて、唯面白しとのみ思ひて、武士の心を察せざるは、何事ぞや」といひければ、諸臣、皆、迷惑して、辭なかり

きといふ。(岡谷繁實一名將言行録)

四、流泉啄木 (金子元臣)

ゆくも歸るも云云  
後撰集、蟬丸、  
「これやこの行くも歸るも別れつつ知るも知らぬも逢阪の關」。

ゆくも歸るも別れつつ、  
知るも知らぬもあふ阪の、  
關の杉むら風だちて、  
わら屋の軒にさす月の、  
影さだまらぬ秋の夜や。  
あはれにたへて蟬丸は、  
わが愛玩の琵琶一面、

蟬丸

敦實親王の雑色。和歌に巧みに、琵琶に長す。

博雅

源氏。最も音律に長す。一五七九年—一六四〇年。

心なぐさにならせども、  
みやこ戀しく友こひし、  
思はずもらすひとり言、  
「心あらん人のきたられよ。」  
「應」とこたへて柴の門、  
ころもの袖も露けげに、  
「我はみやこの博雅」と、  
名のるはいみじの音楽者。  
流泉啄木のひめたる曲、  
こよひや弾くとはや三年、

逢阪山  
近江國滋賀郡  
にあり。

夜な夜なかよふ逢阪山、  
石もりなづくま心に、  
手をば残さず傳へけり。  
撥もてまねくいり方の、  
月のかつらの秋の風、  
岩間にむせぶ水のおと、  
ああ水のおと秋の風、  
今も昔にひびきあふらん。

五、最後の授業 その一

いつもの通、僕は、學校へ出かけて往つた。今朝は、天  
氣は、ほかほか暖いし、そのうへ、空は、からつと晴れて  
ゐる。森のはたでは、お喋舌の黒鳥が囀り、牧場では、木  
挽小屋の後の方で、普魯西兵が、訓練をやつてゐる。  
村役場の前を通りかかると、小な鐵柵のある揭示  
場の前に、大勢の人がたかつて居た。二年この方、あり  
とある不吉の報知や、負けた戦報や、徵發の事や、普魯  
西方の、いろいろの命令や、そんな厭なもの、が、みんな、  
此處から來たのだ。また、何かあるんだなと考へなが  
ら、足も止めず、僕は、アメル先生の、小な校庭へ這入つ

て行つた。

すわる(坐)

開いて居る窓から見ると、僕の仲間はもうみんな、銘銘の腰掛に並んで居て、アメル先生は、恐しい鐵の定木を抱へ込みながら、その前を往つたり、來たりして居る。僕は、そつと這入つて、僕の机の前に坐つた。

フロック

Frock coat  
の略。

僕は、アメル先生が、青色の、上等のフロックを著て、綺麗に、襟のところ、で、襷を取つた、笹縁のシャツをつけ、參觀日か、賞品授與式の時でなければ、被ることもない、縁取の黒の絹帽を被つて居るのに、氣がついた。そればかりか、教場には、何か、非常の事でもありさう

で、嚴な空氣が満ち渡つて居た。

しかし、一番、僕の驚いたのは、教場の奥の方の、いつも空虚な机の前に、村の人が、僕等とおなじく、黙つて坐つて居る事だつた。その人達の中には、三角帽を被つたオーゼー爺さん、前の村長さん、前の競賣吏員さんなどが居た。そして、この人達は、みんな、悲しきやうな顔をして居るのだ。オーゼー爺さんは、縁の蝕んだ、古いABCの讀本を持つて來て、それを、膝の上に乗せ、大きな眼鏡を開いた頁の上に置いて居た。

僕が驚いて居る間に、アメル先生は、講座に上つた。

伯林  
府。獨逸の首

エルザス、  
ロートリン  
ゲン

Elsas. Lothrogen  
佛國領な  
りしが、  
西紀一八  
七〇年普  
佛戦争の  
結果、獨  
逸に歸せ  
り。

みじめ

そして、優しい、しかも嚴格な聲で、僕等に云つた。

「俺の子供達。これが、御前達に、俺の教へる最後の授業だ。伯林から、命令が來て、エルザスとロートリンゲンの小學校では、獨逸語の外、教へてはならぬと云つて來たのだ。新しい獨逸の先生が、明日著くことになつて居る。今日は、佛蘭西語の教へじまひだから、俺は、お前達に、一所懸命聞いて貰はなければならぬ。」

この僅ばかりの言葉が、僕を、あつと動轉せさせてしまつた。ああ、何といふみじめな事だ。村役場の揭示は、その事だつたのだ。

僕の、佛蘭西語の學びじまひ。その僕は、まだ、ろくろく、書く事さへも出來ないのだ。もう、僕は、習ふことも出來ないと思ふと、學校を休んで、禽の巢を探し廻つたり、河で、氷滑をしたりして、無駄に費した時間が、今更怨しくなつた。つい今の先まで、重がつて、荷厄介にした教科書、文典の本も、宗教の本も、今となつては、別のつらい、舊い友達のやうな氣がする。

先生が、取つておきの著物を著て來たのも、この最後の授業に、敬意を表する爲だつた。村の老人達の様

子も、今まで、この學校へ、度々來なかつたことを悔むやうに見えた。この人達の來たのは、四十年も、この小學校に居て、立派に、職務を盡してくれた、僕等の先生に、感謝の意を表する爲でもあつたし、また、失はれた祖國に對する義務を盡す爲でもあつたらしく思はれた。

六、最後の授業 その二

僕が、こんな事を考へて居る時、僕の名を呼ばれたのに、氣がついた。僕の誦誦する番が來たのだ。僕は、眞

こゑ(聲)

はじめの言葉にまごついてしまつた。胸が、一杯に籠み上げて來て、顔を上げること出来ず、腰掛から立つたまま、身體の權衡を取つて居ると、アメル先生の云ふ聲が聞えた。

「フランチ坊や、俺は、今日は、お前を罰しはせぬ。しかし、お前は罰せられるのが當然だ。お前などは、毎日、きまりにいつて居たことだ。いつでも時間はあるのだ。明日勉強すればいい」と。どうだ、今日といふ今日、その結果が、お前に分つたらう。全體、エルザス人の教育を、いつも、その通に、明日に延して居たの

が、エルザス州の、何よりの不幸だつたのだ。今になると、敵國の奴等はいふだらう。何だ、貴様達は、それでも佛蘭西人だといふのか。佛蘭西語が書けも、讀めもしない癖にと。それに、何と、返事が出来る。

先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつた。先生は、佛蘭西語は、我我の先祖からもち傳へた、大事な詞だから、我我はこの詞をよく護つて、決して忘れてはならない。假令、一國民が、奴隸の境遇に落ちようと、その國の詞を護つて居る間は、丁度、牢屋の鍵を持つて居るやうなものだと説いた。

そして、先生は、文典を取つて、僕等に讀んで聞かせた。僕は、自分で、よく、それが解つて行くのに驚いた。先生の説明が、實によく、僕の頭に這入つて行くのだ。僕は、こんなによく、先生の云ふことを聞いて居たこともなければ、先生も、こんなに辛抱して説明したことも無かつた。どうも、この氣の毒な先生は、ここを立ち去るに就いて、自分の知つて居るだけの事を、一度に、みんな、僕等の頭に詰め込んで行かうとするやうに思はれた。

その課目が終ると、今度は、習字の稽古に移つた。先



生は、特別に、僕等に渡してくるために、新しいお手本を用意して來た。そのお手本には、美しい、丸い字で、「フランス、エルザス。フランス、エルザス」と書かれてあつた。

銘銘が、どんなに、一所懸命、字を習つたか、見せたいやうだつた。一番年の行かぬ生徒等さへ、一心に、ちやんと覺悟して、これも、まだ佛蘭西語だといふ風に、習字の線を、わき目も振らず引いて居た。

屋根の上では、鳩が、低い聲で、咽喉を鳴して居たが、僕は、それを聞きながら考へた。鳩も、獨逸語で啼くや

うに教へられるのかしら」と。（菊池幽芳―幽芳集）

### 七、茶碗の茶

嘗て、一人の書生があつて、有名な禪僧渡邊南隱の草庵を訪うて、教を請うたことがあつた。一體、教を請ふには、それぞれ、作法のあることで、むやみやたらに、議論をするのではない。處が、この書生、元來、南隱をいひ込めて、困らせようといふのが目的であるから、大きな聲で、何の彼のと、大いに理窟を並べ立てた。しかし、南隱は、そんなことには、とんと構はぬ。通常人に對

渡邊南隱  
臨濟宗の僧。  
（一五、六三年）

する時と、更にかはりはない。まあ、茶でも、一杯飲むがよいといふ鹽梅で、茶碗に、茶を注いで進めた。書生は、それを、一口飲むか飲まぬに、益、聲を高めて、議論を試みるのであつた。

さうすると、南隱が、急須を取つて、その、まだ飲み盡さぬ茶碗の中へ、又茶を注がうとした。書生は、議論中であつたが、あわてて、いや、もう澤山です。こぼれます、こぼれます」といふと、南隱、その聲に應じて、間髪を容れず、邪心、うちに充てり。理も、亦入らずと云つた。

書生は、面白半分に、からかひにやつて來たのであ

からかふ。

るから、忽ち、その脚下を見透されて、お前の心に、邪曲な考が、一杯に充ちて居る以上は、たとひ、どんな高尚な道理を話して聽かせた處が、それは、何の益にも立たない、眞實の心でなければ、決して、何事でも、身に徹するものではない、高尚な道理といふものは、そんな口先ばかりの議論ではない。誠に、これは、慎まねばならぬとの謂である。流石の書生も、これには、如何にもと恐れ入つてしまつて、頭を下げたといふ話である。

(南條文雄―佛教人生觀)

八、遠慮

遠キ慮ナキトキハ、必ズ、近キ憂アリ。(論語)

過ギタルハ猶及バザルガゴトシ。(論語)

舜モ人ナリ、我モ人ナリ。(孟子)

巧ナル詐ハ、拙キ誠ニ如カズ。(鹽鐵論)

己ノ欲セザル所ハ、人ニ施スコトナカレ。(論語)

病ハ、口ヨリ入り、禍ハ、口ヨリ出ヅ。(口銘)

好事、門ヲ出デズ、惡事、千里ニ傳ル。(事文類聚)

玉琢カザレバ、器ヲナサズ、人學バザレバ、道ヲ知ラ

ズ。(禮記)

わざはひ  
(禍)

中江藤樹

儒者。名は原。

世に近江聖人

と稱す。(二二

六八年—二三

〇八年)

小川村

高島郡にあ

り。今青柳村

に屬す。

王陽明

明の大儒。名

は守仁。良知

の說を立て

て、一世の師

表たり。(二一

三二年—二一

八八年)

九、近江聖人 その一

中江藤樹先生は、俗稱を與右衛門といひ、江州大溝  
在なる小川村の百姓の家にうまれ、學、王陽明の流を  
汲みて、その德行、一世に秀で、遠近、皆、その風を望まざ  
るはなかりきといふ。

先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふ  
と、先生の墓所、小川村に在りと聞き、その村に尋ね行  
きて、路傍の農夫に向ひ、先生の墓所はと問へるに、農  
夫は、畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせんと

て、士人を導きて行きけり。程なく、小き藁屋の前に出  
 でけるが、しばし待ち給へ」とて農夫は、内に入り、やが  
 て出で来るを見れば、木綿の新しき著物のうへに、紋  
 附きたる羽織を著たり。士人は驚きて、さても丁寧な  
 る男かなと思ひて、附きてゆくほどに、やがて、墓所に  
 到りぬ。農夫は、竹垣の戸を開き、いざ入りて拜し給へ  
 といひて、その身は、戸外に退きて恭しく拜伏せり。士  
 人はこの様を見て、再び驚き、さては、衣服を更めたる  
 は、我に對する爲にはあらで、先生を敬する爲にてあ  
 りけるよと思ひつきければ、農夫に向ひて、汝は、藤樹

すぢ。(筋)

先生の家來筋の者なるかと問ひぬ。農夫は、詞を改め  
 て、さには候はず。されど、この村の者は、一人として、先



中江藤樹肖像

生の御恩を蒙らざるものな  
 し。我等が、親を敬ひ、子を慈む  
 ことを辨へ知りたるは、皆、こ  
 れ、先生の御恩なれば、子子孫  
 孫、必ず、その御恩を忘るべか  
 らず」と、わか父母、常に教へ候ひきと答へたり。士人は、  
 そのはじめ、ただ、何となく、一見せんと、の心にて來れ  
 るが、この農夫の舉動によりて、俄に、敬慕の念を起し、

懇に、その墓前に禮拜して、歸りきとぞ。

この一事、以て、先生の徳行の、いかに高くして、また、その化育の、いかによく、下に及びしかを見るに足らん。

一〇、近江聖人 その二

熊澤蕃山は、先生の門人なり。この人の、先生に従ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて、京へ上るに、江州河原市より、馬を雇ひて、榎木の宿に至り

河原市  
高島郡  
榎木宿  
滋賀郡

たづぬ(尋)

よみがへる  
(蘇)

て、泊りぬ。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと、鞍を解きつれば、財布、一つ出でたり。取りあげて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、いそぎ榎木に走り行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して、委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取り出して、返しけり。飛脚は、死したる者の蘇りたるこちして、行李より、別の金子十五兩を取り出して、馬方に與へ、もし、この二百兩なくば、わが一命を失ふのみならず、親、兄弟までも、重き罪に行はれん。されば、この恩、なかなか、言葉のいひ盡すべきにあらず。まづ、當座の御禮までに、これを贈

り奉る」と涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける顔色にて、そなたの金を、そなたに取り納め給ふに、何の禮いふことかあるべき」とて手にだに取らず。

色色にこしらへいへども、更に受けずして、歸らんとする故、止むことを得ず、十兩となし、五兩となし、三兩となし、段段減じて、遂には、金二歩となし、せめて、こればかりは」と、理を盡し、詞を盡していふに、この金を受くる程ならば、二百兩をも留め置くべし。それだに、かく返し申すからには、聊にても、謝禮を受くるは、わが心にあらねど、餘に、餘儀なくのたまへば、さらば、鳥

うち(氏)

# 致良知

中江藤樹筆蹟

目二百文を賜へ。これは、今夜休むべき所を、ここまで追ひかけ來れる賃錢なり。わが取るべき錢なれば、申し請くべし」といひて、二百文を懐にし、歸らんとす。

飛脚は、感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに、名ある者にあらず。又、何一つ知れる者にあらず。只、わが在所の近くに、小川村といふ所あり。そこに、與右衛門といふ人おはして、夜毎に、講釋といふことをす。某も、折節往きて聞き申したるに、親には、孝を盡す

べし、主人は、大切にすべきものなり、人の物は、取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、わが物にあらざれば、取るべき理なしと心得たるまでのことなり」といひすてて歸りぬ。

飛脚は、それより、京へ上りて、いつもの宿に到り、さても、この度は、辛き命活きのびて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を、委しく語りけり。

蕃山をりふし、田舎よりのぼり居て、學問修業の最中なりけるが、この物語を聞きて、その人こそ、誠の儒

といふものなれとて、翌日、すぐに、江州にゆきて、小川村に、藤樹先生を尋ねて、隨從を願ひたるに、人に教へ申すほどの學徳なし」とて、更に許し給はず。蕃山、ひたすらに願ひて、二日が間、先生の門にたたずみて歸らず。先生の老母、これを氣の毒がり、よしや、まづ、内に入れ申せよ」とあるに、辭みがたくて、内に入れ、遂に、師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を、備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて、固く辭し、門人熊澤といふものあり。御役にも立つべきものなり」とて、蕃山を出されけり。いづ

備前侯  
岡山の城主池  
田光政(二二  
六九年—二三  
四二年)

れも格別のことなり。(橋南谿—東遊記による)

一一、同情

米國の政事家、法律家として名高きダニエル、ウエ  
 ブスターが、尙幼かりし頃の事なり。兄某が、一疋の鼯  
 鼠を捕へて、殺さんとしけるを見て、憫に思ひ、善惡の  
 辨なき獸を殺さんはむごし。命を助けて、放ち給へ」と  
 いふ。兄いはく、然らず。こやつは、屢わが家の畑を荒し、  
 作物を害せり。今殺さずば、復、更に、同様の罪惡を重ぬ  
 べし」と。ダニエル、重ねていはく、兄上よ。世に生きとし

ダニエル  
ウエブスタ

Daniel Webster  
二二四四  
二年一  
五年一  
二二

わきまへ  
(辨)

生けるもの、物食はでは、生活すること能はず。兄上が  
 いはるる罪惡も、彼に取りては、食を得ん爲の、止むを  
 得ざる働のみ。よしや、眞に惡事なりとも、死に當るほ  
 どの罪にはあらじ」と。

兄弟の押問答は、父の耳に入りぬ。父は、兄弟に向ひ、  
 「雙方とも、言ふことに、一理あり。われ、裁判官とならん。  
 兄は原告なり、ダニエルは辯護士なり。鼯鼠を被告と  
 して、ここに、公判を開くべし。原告たる兄の申立はい  
 かに、まづ、それを聽かん」といふ。兄は、乃ち、  
 「父上よ、否、判事閣下よ。被告は、土中に棲息するを天



くつがへす  
(覆)

分とす。然るに、かれ、時には、土上に出て來り、その際、田畑の土を浮かせ、蒔きたる種を覆し、作物の根を緩め、甚しきに至りては、これを食ふ。農事を害すること甚し。この間も、わが父の畑を穿ちて、蜂の巢の如くにし、剩へ、馬鈴薯の大いなるを擇びて食へり。こやつの如きを助けおかば、今後の害は一倍たるべし。且、經驗によりて、狡猾の度を加ふべければ、再び捕ふること困難ならん。すべからず、今殺して、後患なからしむべきなり。又、一つには、せめてもの償に、その皮を剥ぎて、何かの料とせん。

おほかみ  
(狼)

と、辯舌濺まず、滔滔と述べければ、父の判事も感心したる體なり。その時、ダニエルは、徐に、口を開き、寛仁なる判事閣下よ。願はくは、まづ、被告が、現境に陥りたる原因を察せらるべし。彼等とても、有情の動物なり。天地間に生まれ出でたるうへは、生を保つ權利を有すべき道理なり。かつ、彼等は、虎狼などの如き、暴戾の動物にあらず。生存せしめん、に、何ほどの害かあらん。原告は、害、害と呼べども、被告が、生を保つ必要上より食ひしは、僅に物の根のみ、菜根、草根のみ。人間に取りて、幾許の害ぞ。彼は、惡と知り

て爲ししにあらず、性に隨ひて然せしのみ。惡と知りて、惡を爲ししものこそ惡むべけれ、性に隨ふものを罰すべけんや。人は、萬物の長ならずや。かばかりの自由を、下等動物に吝みて、その生をすら奪はんとするか。賢明なる判事閣下よ、被告の情狀を察せられて、慈悲の判決を賜へ。

と、至誠、面に溢れ、慨然として述べけり。辯護の半より、判事の目は潤ひぬ。ダニエル述べ了りて、父の面を見上ぐれば、父は、涙を落しつつ、聲さへも震ひていへり。「兄よ、鼯鼠を放て、放て」と。(坪内逍遙)

一二、 兎 狩

收穫が濟む、霜が降る、裏山の楓が染る。すると、兎狩の季節が、そろそろ始る。つくろひに遣つてあつた綱も出來て來る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆、草鞋の用意に忙しくて、僕等は、何も、手に著かぬ。

愈その日になつた。炊事番は、夜半に起きて、握飯を拵へる。皆支度して、塾の庭に勢揃する頃は、午前三時過であらう。月が、白く冴えて居る、三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は、綱をかついで、

せいぞろへ。  
(勢揃)

高らかに、詩などを吟じて行く。僕等は黙つて、しかし、威勢よく、ついて行く。

ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたたましく、犬の吠えかかる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう、一里半も來たらう、月落ちて、野は、一面の曉闇、前に行く者の姿も、はつきりとは見えぬ。ふと、すばらしく大きな、眞黒なものが、鼻の先にあらはれる。山だ、目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら、天明を待つて居る。

僕は、藁の上に寝ころんで居ると、背は寒いが、顔や

腹は、焚火に暖る。炎炎と立ち昇る焰の間に、ちらちら見えて居た、一同の赤い顔が、次第に遠くなつて、ついで、うつとりと一寢入したと思へば、忽ち起される。眼を摩つて起き上ると、なる程天明だ。東が白んで、曉の風が、切るやうに、面を吹く。焚火の迹だけ、黒い圓を描いて、四邊は、一面の霜だ。やがて勢揃して、山にかかる。進軍の號令がかかる。鬨の聲が、一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう、朝日がきらきらと、秋の空に昇つて居る。

今思うても愉快だ。秋が、黄に、紅に、紫に、鶯に、あらゆる色彩のかぎりを盡した木を押し分け、葉を打ち拂

ひ、聲をあげて登る心地、網近くまで追ひつめて、如何かと思つて居る時、どこからか、とれたといふ聲がして、われ知らず、棒を振つて勝鬨をあげる心地、網番をして、攻め寄せる勢子の叫の間近になるに、兎のうの字もかけて來ず、ああだめと落膽する時、突然、がさがさと、音をさせて、覗く鼻先へ飛び込んで、二つ三つ、網ながらに蜻蛉反る兎を、樹蔭から飛びかかつて押へる心地、落葉かき分けて、谷川の水を、口づけに飲んで、木の根、草の上に、脚投げ出して握飯にかぶりつく心地、食つてしまつて、落葉の床に、仰向に寝て、碧玉より

も澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を、冷冷した風に吹かせる心地、數へ立てると、際限も無い。

秋の日の短さ、まだ、三疋しか取れぬに、もう、鴉が鳴き出した。遙に見える湖や川は、金のやうに、夕日に閃いて居る。獲物は、蔦葛で、四脚を縛つて、大人組が昇いで、とくに還つた。僕等は、紅葉の枝を折つて、ぶらぶら後から還つて行く。山を降りて、野に出ると、日は、かなたの森に沈んで、夕煙が、村村に立ち昇ると思ふと、薄紫にけぶる野末に、大きな月が、顔を出す。その月が、やや高く、やや小さくなつて、うちつれて、歩み行く影の、大

つたかづら  
(蔦葛)

分短くなる頃には、僕等はもう塾に歸り著いた草鞋を脱いで、顔を洗つて、先生はじめ、一同大胡坐で、てんでに、兎汁を盛つて、飯を食ふ。この兎汁は、別名を大根、胡蘿蔔、牛蒡、豆腐、蒟蒻汁といふのではあるまいかと、思ふほど、正味は少い。しかし、その味、否、それよりも、食つてしまつて、著物も更へず、ぐつすり寝る時の心地は、何ともいへない。夢も見ない、身動もしない。翌朝の九時頃までは、死骸も同前だ。(徳富蘆花)

一三、諭言五則

をしへ(教)

鹿の兒あり、母に隨ひて、出でて遊ぶ。騎して、弓を手にし、矢を負へる者に遭ふ。母のいはく、汝、かの肩上にある物を知るか。飛び來て、身に中る時は、必ず死せん。汝、急に、これを避けよと。鹿の兒、首を振りていはく、兒は、その飛び來る狀の如何を試みんとて、母の去るにも去らず、遂に、矢に中りて死せり。世には、頑にして、教に従ふことを知らざる、往往、かくの如きものあり。

一小猴、人の、髭を剃るを見て、刀を偷み、これに擬して、みづから、その鼻を傷く。世の、習はずして、事に従ふもの、多くは、このたぐひなり。

一貧兒あり。菌を採りて歸り、その母に誇りていはく、阿母の採るところは、常に醜し。兒は、その蓋の眞珠の如くにして、その欄の、臙脂の如くなるものを獲たりと。母これを見て、歎じていはく、これ、毒ありて食ふに堪へざるものなり。兒、これを誡めよ。外美なるものは、その中、多く、毒を含むものなること、この菌のみにあらずと。

いづくんぞ  
安んぞ

栗鼠、樹を攀ぢて、胡桃を摘み、その皮を噛み破り、顰蹙していはく、何ぞ、この苦きやと。既にして、核に及ぶ。乃ち、笑ひていはく、まづ、苦きを喫せずば、安んぞ、この

滋味を得ることあらんと。

一農夫あり。兒を携へ、出でて、稻の熟せりや否やを檢す。兒問ひていはく、この稻の穂を見るに、或は昂く、或は俯す。いづれか貴きと。父、二つながら、その穂を抽きて、これに諭していはく、内、充實すれば、必ず下る。かの、昂然として、屈することを知らざる者の如きは、皆その、未熟なるによりてなりと。(那珂通高)

一四、東京

東京の地は、古の武藏野の一角なり。その昔を思へ

ば、萱薄の廣野、潮入の葦原、ただ茫茫として、草わけ渡  
る風の聲も寂しく、彼處に一村、此處に一村、牧童、漁翁  
が、煙を揚ぐるばかりの片田舎なりき。

源平時代には、平氏の一族なる江戸氏、ここに住み  
て子孫代代、この地を領したり。下つて、室町幕府の衰  
へし頃、關東管領上杉氏の老臣太田道灌、千代田の地  
を相して、城郭を構ふ。即ち江戸城にして、長祿元年、工  
事成りぬ。城樓に上りて見渡せば、關東の平野は、東に  
筑波の翠、西に富士の白妙、その外に、眼を遮るものも  
なし。思ふに、封建の要害よりも、文明の都會たるべき

太田道灌

名は持資。道灌はその法號。二〇九二年—二四六年

筑波

常陸の國にあり。古來、わが邦の名山に推さる。

小田原

相模國足柄下郡。

その手に歸す。天正五年なり。

處なり。道灌、その主に殺されて、城は、上杉氏の直轄に  
なりしが、小田原の北條氏が、上杉氏を破るに及びて、  
その手に歸したり。その後、豊臣秀吉、北條氏を滅し、そ  
の地を、徳川家康に與へて、江戸城に居らしめたり。  
天正十八年八月朔日、家康入城す。時に、城内いたく  
荒れ、そぎ葺の屋根は漏り、船板の屏は朽ちて、見るか  
げもなき様なるを普請し、又、町割を定め、沼を埋め、渠  
を開き、水道を通じ、橋を架けて、しきりに、新府を經營  
す。これより四方の民來り集り、關東の中心は、小田原  
より轉じて、江戸に移れり。

關が原の戦  
慶長五年九  
月、家康、石田  
三成を關が原  
に破る。

關が原の戦を経て、家康が天下の覇權を握りしよ

り、諸大名は請う

て、ここに、その邸

を營み、寛永年間

には、また、大名の

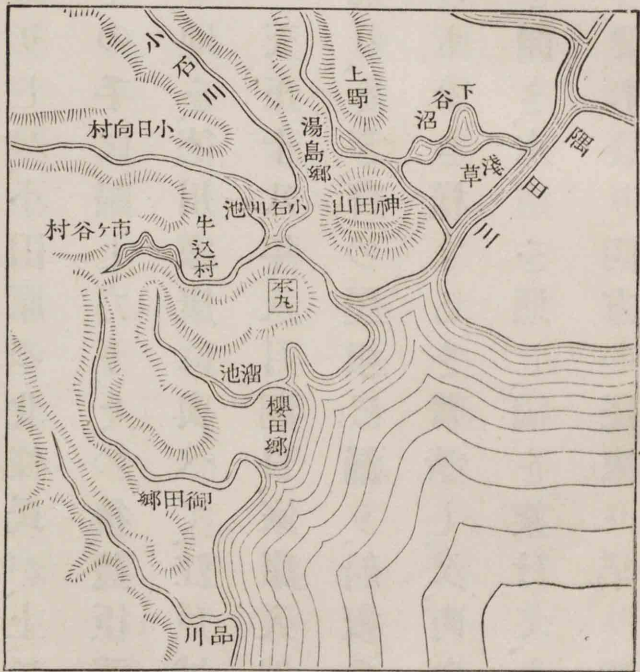
妻子を、江戸詰と

したれば、市街は、

著く擴り、山の手

には、武士屋敷、門

を列ね、下町には、町家、店を並べて、わきて賑へる所は



家康開府當時の江戸

「土一升、金一升の稱あり。風強き土地なれば、大火多け

れど、火事は

江戸の花と

もいひ、一災

ごとに、市區

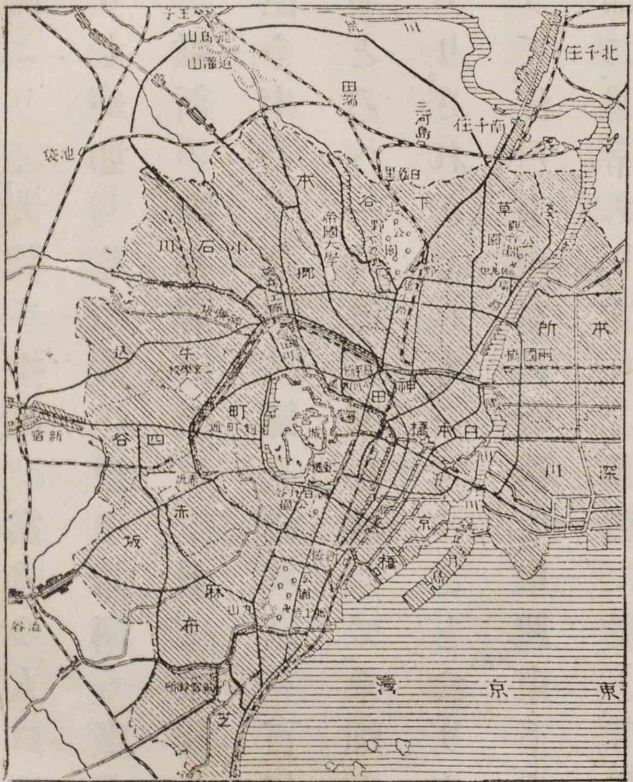
を改正して、

繁昌は、年年

に増加す。川

を越え、田を

埋め、延いて、止る所を知らざれば、時に、令を發して、市



現代の東京



街の膨張を制限したりしこともあり。天明頃の計算によりて、大體を推せば、當時の人口は、二百萬に近かりしが如し。花の大江戸の誇稱も虚しからず。

維新の際、幕府は倒れ、旗本は離散し、大名は、妻子、家臣を率ゐて、藩國に歸りたれば、三百年の覇府も、忽におとろへ、一時は、人家を壊ちて、桑畑となすものさへあり。されど、それも、一時のことなりき。明治元年、詔ありて、江戸を東京と改稱し、車駕東下ありしが、一旦、京都に、還幸あり。されど、議、更に動き、翌年、再び行幸ありて、永く、千代田城を、皇居と定め給ふ。これより、東京は、

わが邦の帝都となれり。

東京に遊ぶもの、二重橋の際に跪きて、宮城を拜し、一步南すれば、日比谷公園に入るべし。立ちて、四方を望めば、大厦、高屋、巍然として聳ゆ。それより、電車に乗りて、坦坦たる大道を走れば、到るところに、江戸の舊觀の改れるを見る。東宮御所は、もとの紀州藩邸、士官學校は、尾州藩邸にて、水戸屋敷は、砲兵工廠となり、加賀屋敷は、帝國大學と變りぬ。古の迹の亡ぶるは惜しけれども、都府の發達は、嬉しからぬにあらず。一喜一憂、低回して、古今の變に驚くのみ。(藤岡作太郎)

日比谷公園  
麹町區にあ  
り。

一五、桃の核

ニューヨーク  
 ニューヨーク州の  
 首府。  
 New York  
 フイラデル  
 フィヤ  
 Philadelphia  
 ペンシル  
 バニヤ州  
 の第一の  
 都會。  
 ワシントン  
 コロンビ  
 ヤ州の首  
 府。  
 Washington  
 ナイヤガラ  
 ニューヨ  
 ーク州に  
 あり。  
 Niagara  
 シカゴ

余、昨年、歐洲漫遊を終へて米國に航し、ニューヨ  
 ク、フイラデルフィヤ、ワシントンを遊覽し、ナイヤガ  
 ラ瀑布を觀、シカゴを経て、カナダの廣原を横ぎりし  
 ことあり。この廣原は、頗る、山水の眺に乏しきところ  
 にして、明けても、暮れても、ただ茫茫たる原野の中を、  
 輾轉たる車の響にまかするのみ。されば、余は、ひたす  
 ら、この地の民俗を觀察するを以て、その日毎の務と  
 なし、途中、しばしば下車して、そのあたりの僻村に、足

Chicago  
 イリノイ  
 州にあ  
 り。  
 カナダ  
 英國領。  
 Canada  
 セントポー  
 ル  
 Saint Paul  
 ロッキーマ  
 ン山  
 北アメリ  
 カにて、  
 廣くかつ  
 高大なる  
 山系にし  
 て、コル  
 チレラ山  
 系に屬  
 す。  
 Rocky

を入れ、そのさまざまなる風俗を觀、以て、わづかに、長  
 途の旅情を慰めたりき。  
 汽車の、セントポールといふ地より、支線に進み入  
 りたる時のことなりけり。車中は、乗客、極めて少く、寢  
 臺附の一室には、余と、余の同行者なる某海軍中佐と  
 を外にしては、米國の紳士二人を乗せたるのみなり。  
 されば、我等と、その紳士達とは、一二日の後、自ら親し  
 くなりて、互に、姓名を名のりて、さまさまの物語にう  
 ち興ずるやうになれり。聞けば、その紳士の一人は、ニ  
 ユーヨークの豪商にて、このたび、ロッキーマンの麓に、

一の新鑛山を發見したれば、それを調査せんが爲に、おのが會社の技師なる、他の一人の紳士を伴ひて行くなりとか。さて、我等はその紳士の贈りくれたる、美しき桃の實を割きて、且味ひ、且談じゐたるが、余は何心なく、その桃の核を、足下なる唾壺の中に投げ棄てつ。その時、豪商は、つと立ちあがりて、その核をば、唾壺の中より取り出して、窓外に擲ちたり。かくて、怪みて見つめたる余を顧みて、徐にいふやう、

乞ふ君、しばらく、余の言を聞け。見らるる如く、わが米國は、なほ、幼兒の時期にあり。これを生長せしめ、

あぢはふ  
(味)

これを發達せしめ、以て、完全の壯丁たらしめ、よく、歐洲の文明に對抗せしめん爲には、我等は實に、多大の苦心と勞力とを積まざるべからず。されば、我等は、實に、君等外國人の同情ある援助を乞はざるべからざるなり。われ、今、君の棄てたる一桃核を拾ひて、この、茫茫たるカナダの大野に擲てり。おもふに、君は、僕の所爲を解せざらん。君は、年なほ壯なり。後年、君が、再び、この地を過ぐる折あらん。その折よ。君、もし、この桃核よりして、ここに、一株の桃樹の、綠葉、蓊蓊として、蔭をなせるを見ば、そもや、いかなる

快感に打たるべきぞ。ああ、我等は、君によりて、ここに、一果樹を與へられたるなり。願はくは、君と、再會を、その、他日の桃樹の下に期せん。

と。余は、この言を聞いて、實にいふべからざる慚愧の念に打たると共に、また、その米人の經濟の念の、いかにも深きを思ひて、そぞろに、渴仰の情を禁むること能はざりき。天橋乙羽—歐米小觀による

一六、朝鮮雜觀 その一

「ミカドの帝國」を書いた、亞米利加人グリフィスは、

グリフィス  
明治の初  
年日本御  
雇教師た  
りき。  
Grifis

朝鮮を「仙人國」と呼んだ。この仙人國も、今は、我が大日本の新領土となつて、一千萬餘の仙人も、皆、我が新しい同胞である。仙人も、段段、俗人の仲間入をして、活動して貰はなければならなくなつたが、黒い冠をかぶり、白い衣を着て、悠然として、市街をあるいて居る朝鮮紳士の風采を望めば、如何にも仙人らしい容子が、今でも見える。人毎に、長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を、一層強からしめるのである。

たづさへ  
(携)

貴賤上下、悉く、純白な著物を纏うて、見渡す限眞白なのは、全世界中、恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのでは無く、冬でも、やはり同じである。これには、一つの傳説があつて、昔ある王様が、父王の死を悲んで、始終、喪服を著けて居られたので、人民が、皆これに倣つたのだといふ。一應聞けば、尤らしい、殊勝な話であるが、この傳説は、無論作事であらうと思ふ。何處の國でも、古い時代には、眞白な著物が流行つたが、その中に、色色の染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれた。文化の、他の方面が、種種に、變化を受けたにも拘らず、

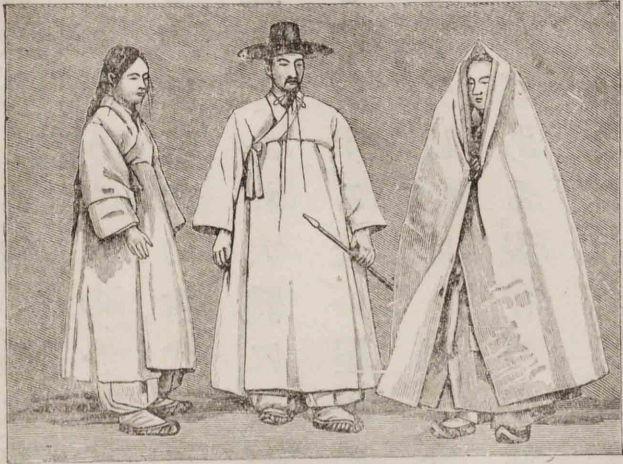
純白の衣服が、數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねば

ならぬ。萬事萬端、支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へれば、面白い事である。

子供は、折折、桃色や、萌黄や、藍色の著物を著て居る。それも、全部同じ色で、日本

の娘の子のやうに、美しい花紅葉の染模様では無い。

もえぎ  
黄 (萌)



俗 風 鮮 朝

婦人も、ままだ、紅色、萌黄色の衣を著けて居るが、模様や、縞は、少しも無い。殊に、婦人が、長衣といつて、我がかつぎのやうなものを著て、目ばかり出してあるいて居るのは、日本の古代の風俗その儘で、服制に、多少の相違こそあれ、大體に於いて、古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下で、眞桑瓜などを食つて居る容子は、何處と無く、今昔物語を、まのあたりに見るやうである。現在の生活に於いて、朝鮮人が、優長といふばかりでは無く、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でも、やはり、そろそろと、昔の歴史が流れて行くので

今昔物語  
源隆國の著  
いふ。六十卷。

は無いかと思はれる。

衣冠を正しくすることは、慥に、朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、滅多に、肌を露すことは無い。これは寒い氣候の關係から、自然、習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく、素肌を、人前には出さない。支那の労働者も、身體の上部こそあらはせ、腰から下は出さないが、朝鮮人で、肌を脱いで居るのは、終に、一人も見なかつた。

朝鮮人は、雨具を用ゐぬといふことは、かねて聞いて居つた。今は、田舎でも、蝙蝠傘を手にしてあるいて

居る人を見受ける。それよりも、不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に、小さな傘を載せて居ることである。竹の骨で、油紙を張つたものである。成程、日本の傘は、これを大きくしたものだ。なと感服した。又、頭に、雲水坊主のかぶるやうな深笠の大きいのをかぶつてある。いて居るのが、往往ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は、一年、二年、三年、必ず、常に、あの笠を著けて居るといふ。如何さま、舊い禮儀はやかましい處だ。朝鮮、支那、土耳其、皆、それぞれの冠物を、今にも保存して居る。日本人は、古い物を保存して居るが、新しい

ものは、又何でも用ゐる。洋服に、下駄も履き、紋付の羽織に、シルクハットもかぶる。

Silk hat ト  
シルクハット

一七、朝鮮雜觀 その二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には、例の支繫チケツといふものをかけて、一切の物を、それで運ぶ。八百屋が、唐茄子や、胡瓜を賣るのにも、背に負うて來るので、日本のやうに、天秤棒で、兩端に擔ぐことは無い。すべてが、山に、柴刈に行く、昔話の爺さん式である。女は、洗濯物でも何でも、頭に載せて行く

大原女  
京都の北八瀬  
大原邊より、  
京都に物賣に  
來る女子をい  
ふ。

ので、これは、京都の大原女式である。しかし、大原女のやりに、張板や、梯子などをかついてあるくのは、見受けなかつた。

朝鮮には、虎が居る。竹に虎といふから、竹も、澤山ありさうに思ふが、竹は少い。これは、氣候のせゐである。竹の簾や、扇子や、竹細工も、いくらがあるが、概して、日本のやりに、竹を、種種の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は、竹の名所で、唐竹真二つ割で、天秤棒の代にしたり、竹で、船を作つたりして居るが、京城では、竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見る

ゐなか(田舎)

と、大抵、繩にかけ渡してある。又、田舎などでは、丘の上にしひろげて並べてあるだけである。桶、盥のやうなものにも、竹の籬かきは無ない。竹の無い所へ行くと、今更に、竹の效用の廣いのに驚かれる。

水道栓の側で水を汲んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函を用ゐて居る。如何にも貧乏げに、あはれに見える。瓢箪をたち割つたものが、水を汲む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も、一種の靴であつて、日本のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に、足駄の齒の



ついたものはあるが、鼻緒を立てて、その鼻緒を足の指にはさんで歩くといふ藝當は、日本人より外には出來ぬのであらう。

朝鮮の家は如何にも低くて、むさくるしく見える。京城には、さすがに瓦葺の家も見えるが、田舎は、殆ど、藁屋ばかり、その藁の葺方が、日本の如く、綺麗に端をそいでない爲、唯、藁を打ちかけたやうに、如何にもきたなく見えて、遠くから見れば、豚小屋の様にしか見えぬ。寒さを恐れるため、窓が少いから、陰氣で、日本の田舎家のやうに、からりとして居らぬ。日本ののは、小さく

すずしい  
(涼)

ても、きたなくても、からりとおつ開いて居る。あれでは、夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから、割合に涼しいとのこと。床は土で、その下がえん温突で、冬は、火を焚いて暖めるのである。元來、朝鮮では、庶民には二階建三階建を禁じたのである。それ故、庶民の家は、皆低い、地に這つて居るやうである。又、家をあまり立派にすれば、金持と認められて、すぐに、取り立てられるから、金持でも、わざと、外觀を汚くして居たやうな原因もあらう、併合後、新築する、鮮人の家には、段段と、二階造の高いのも出來るさうである。

大院君

名は李昰應。  
李大王の生  
父。二四八〇  
年―二五五八  
年。

それに比べれば、王宮は、比較にならぬ程、規模も大  
きいし、立派である。就中、さきの王宮景福宮は、大院君  
の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿、樓閣が相連つて、  
廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧  
みず、人頭税までも課して造り上げたといふ。いはゆ  
る、民の膏血を絞つて築いたので、この宮殿が、即ち、李  
朝に崇つたのだといはれて居る。

この宮の正門興化門前の通などは、幅六十間、東京  
にも、滅多に無い。現王宮昌徳宮も拜觀したが、これは、  
近世の洋風に塗り替へ、西洋の椅子、ソファなどが

Sofa  
ソファ

けづり(削)

あつて、面目が改つて居る。建築には、丹碧を塗り付け  
てあるばかりで、材木の削方、仕上方は、日本のやうに  
立派で無い。一體に、樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の  
祕苑だけは、流石に、老樹が生ひ茂つて居る。しかし、何  
等林泉の美としては無い。小い溪流の石に題した句に、  
「飛泉三百尺、疑自九天來」とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で、労働を嫌ふといふが、農業に、精を  
出して働いて居るのを見ても、決してなまけるばか  
りの人間では無い。朝鮮の山を、禿山にしたのも、朝鮮  
の家屋を、豚小屋のやうにしたのも、乃至は、長煙管を

悠然として  
云々  
陶潛の句に  
「菊を東籬の  
下に採り、悠  
然として南山  
を見る」。  
苛政は云々  
禮記に「苛政  
は虎よりも猛  
し」。

列子  
名は禦寇。支  
那周代の人。  
列子八卷を著  
す。

くはへて悠然として南山を見て居る、白衣の民を作  
つたのも、皆、古來の惡政の罪である。

苛政は、眞に、虎よりも猛である。憫むべき、我が一千  
萬の新同胞は、今や、仙人の生活を、次第にはなれて、嬉  
嬉として、我が聖天子の德澤に霑ひつつあるのであ  
る。(芳賀矢一)

一八、愚公の山

諸君、列子の著書を見給へりや。愚公といふ人あり  
けるが、家居近く、山のあるを厭ひて、よそへ移さんと

笑ひ。

て、日に、子供引き具し、手づから、耒耜を執りて、一簣  
づつ毀ち取りけるを、智叟といふ人、これを見て、かく、  
大いなる山を、僅なる人の力にて毀てばとて毀ち盡  
さるべきかと、その愚さを笑ひければ、愚公聞きて、「わ  
が代より毀ちそめて、わが子の代にも、繼ぎて毀ち、わ  
が孫の代にも、亦、その子の代にも、繼ぎて毀ちなば、終  
に移されざることやはあるべき」といへば、愈笑ひけ  
り」となん記し置かれける。元より寓言なれば、この人  
ありしにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世  
に、愚なりといへば、愚公と名づけ、智叟がいふやうな

る事は、世に、智なりといへば、智叟とは名づけけるならし。

およそ、天下の事、愚公が如くならば、遅くとも、また  
びは成就すべし。然るに、世に、智ありと稱する程の人は、大かた、智叟が心にて、愚公が、山を移すやうの事を聞きては、その愚を笑ふ程に、何事も、その功を成就せぬなるべし。されば、世のいはゆる愚は、反りて智なり、世のいはゆる智は、反りて愚なり。それ故に、禦寇が、世を諷してこそ、かくはいひつらめ。(室鳩巢一駭臺雜話)

一九、一燈錢

同社中  
松下塾の塾生  
等をいふ。  
まうく(儲)

この度、同社中申しあはせ、自分自分の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたきことに候。非常の變、不意の急にさし懸り候はんにも、囊中拂底にては、さし支ふるものに候。有志の人の、牢獄に繋がれ、又は、飢渴に迫り候者も、おひおひ相助けたく、義士、節婦の碑を立て、墓を築く等にも、力を盡し、手を伸したきことに候へども、同社中、有餘の金もあるまじきことに候へば、毎月、寫本なりともして、僅の貯蓄致し置きたく、

松下塾  
長門國萩の東  
郊松本村なる  
吉田松陰の  
塾。

貧者の一燈  
昔佛に、王は  
萬燈を、貧女  
は一燈を供へ  
たるに、王の  
萬燈は風のた

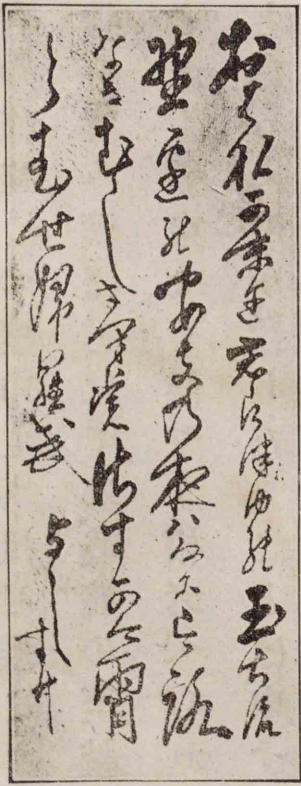
月末、松下塾まで、銘銘持ち寄り致すべく候。半年にもせよ、一年にもせよ、塵も積れば山となる「理にて、きつと、他日の用に相立つべく考へられ候。尤も、同社中、身の膏を搾り出して、集むることなれば、迂闊に費すべきにあらず、已むを得ざる事あらば、同社中申しあはせの上にて、取り揃へ申すべく候。抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴、長者の身ならば、尙、如何様にも、相計ふべけれど、我我にては、かくまでにするは、「貧者の一燈」とも申すべきことに候。至誠の貫かぬ理は、よもあるまじ

めに消え、貧  
女の一燈のみ  
は消えざりき  
と、佛經に見  
えたる故事。

先師  
吉田松陰、名  
は矩方。萩侯  
の臣にして、  
幕末愛國の士  
なり。(二四九  
一年—二五一  
九年)

く候。これに依つて、この度取り立て候金を、一燈錢とは名付くるにて候。

一、毎月、寫本六十枚づつ、村塾まで、必ず持ち寄



久阪元瑞筆蹟

るべく  
候事。  
一、寫本  
料は、先

師の定むる所、眞字、十行二十字五文、片假名、同斷四文の事。

一、一日、僅に二枚づつの事なれば、さまで、勉強

のならぬことはあるまじ。もし、この枚數不足の時は、代を以て相償ひ、必ず持ち寄り、これあるべき事。

右の條條この度申しあはせ候。これ式のことに、骨を吝み候ほどにては、我我の至誠つらぬき候ことも覺束なく候やう、相考へられ候。銘銘、きつと怠らぬやう致したきことは、申すもおろかに候。以上。(久阪元瑞)

二〇、わが幼時

わが幼き時、上野物語といふ草紙ありけり。これは、寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せるなり。わが三歳の春の頃、火燵に、足をさして、腹這ひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を求めて、透寫しけるを、母人の見給ひて、十の中、一二は、まことの文字もありければ、わが父に見せ參らせけるを、父の友人の來ては見けるより、人人も聞き傳へて、その寫したる物どもを取り傳へて、めではやしたりき。

その後、常の戲に、筆執りて、物書く事のみをしければ、おのづから日に、文字をも見知りたれど、物讀

寛永寺  
東京市上野公園内にあり。  
東叡山と號す。關東天台宗總本山。

父  
名は正濟といふ。

往來物  
 日用文を集め  
 たる書の稱。  
 戸部  
 上總國久留里  
 の藩王土屋民  
 部少輔利直。  
 戸部は民部省  
 の唐名。  
 太平記評判  
 五十卷あり。  
 和田助則の作  
 さいふ。

む師友とすべき人なかりければ、只往來物の類などを讀み習ふのみなりき。戸部の家人に、富田とて、生國は、加賀の國の人と聞えけるが、太平記評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。夜夜に、わが父など寄り合ひつつ、それを聽聞せられけるが、わが四五歳の時、常に、その座に侍りけるに、夜いたく更けぬれど、終に、座を起つこともなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもあるを、人人、奇特のことなりといひあへりき。

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しは、文字など、あ

りけるが、七言絶句の詩、三首まで教へて、その意を解き聞かせられければ、やがて、誦を成して、そを、人にも



新井白石肖像

吟じ聞かせたりき。この兒、才あり。いかにも師を擇びて、學ばしめらるべしなどかの人もいひけれど、頑なる昔人等のいひけるは、昔より、利根、氣根、黄金の三こん無くては、學匠になり難し」といふなり。この兒、利根こそうまれ付きたらめ、尙幼くして、その氣根の程も測り難く、家富めりとも見

をさなし  
 (幼)

かなふ協

えねば、黄金の事も心得られずなどいひあへるに、わが父も、戸部の御いつくしみ深く、常に、御側を離し給はねば、學に入れ、師に従はしめんことも協ふべからず。されど、彼の、幼きより、物書くことをば、人人に語り誇らせ給へるなれば、せめては、物書き習ふことのみは、せさせたきものなり」とて、わが八歳の秋、戸部の上總の國に往き給ひける後に、手習ふことを教へられけり。その冬の十二月に、戸部歸り給ひければ、常に、傍に侍ふこと、元の如く、明年の秋、復、國に往き給ひける後に、課を立てられて、日の中には、行草の字三千字、

たへ堪

夜に入りて、一千字を限りて書き出すべし」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課、いまだ満たざるに、日暮れんとすること度度にて、西向なる竹縁の上に、机を持ち出でて、書き終へぬることもあり。又、夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられたる者と、窃に議りて、水二桶づつ、かの竹縁に汲み置き、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ捨てて、まづ、一桶の水をかぶりて習ふに、一時は、その冷なるに、目覺むる心ちすれど、しばし、程經ぬれば、身暖になりて、またも睡くなりぬ。また水をかぶること、前の如くし



て、二たび、水をかぶりぬる程には、大やうは課をも充て得たりき。これ、わが九歳の秋冬の間のことなり。

この頃よりは、わが父の、人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の秋、また、課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に、淨寫して、參らすべし」と命ぜられ、さて、命の如くに、事を終へつれば、冊になして、戸部に見せ參らするに、褒め給ふこと大方ならざりき。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふほどの文ども、大方は、我に命ぜられき。

庭訓往來

玄慧法印の作  
さいふ。十二月往復の書簡文なり。

まゐらす  
(參)

又、十一歳の時に、わが父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることのあるを、我にも、この技教へられんことを望むに、「わぬし、いまだ幼し。これらの技學ばんこと早かり」といふ。さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと、少しも心得ざらんには、刀、脇差腰にせんこと、不用のことにや」といひければ、そのいふところ、實にことわりなり」とて、一つの技を傳へて、習はしめられけり。

かかりし程に、その年、十六になれる者の、我と、藝を試みんといひければ、木刀を取りて、三度合ひて、三度

まで勝つことを得たりき。その後は、常に、かかる武藝のこともを好みて、手習ふことなど、心にも染めずありけれど、物讀むことは好みければ、わが國の物語、草紙等の類をば、殆ど見盡せり。(新井白石一折たく柴の記)

二一、南洲遺訓

事、大小となく、正道を踏み、至誠を推して、一事の詐謀をも用ゐるべからず。人、多くは、事のさし支ふる時に臨み、策略を用ゐて、一旦、その差支をとほせば、後は、事宜次第、工夫の出来るやうに思へども、策

略の煩、屹度生じ、事、必ず敗るるものぞ。正道を以て、これを行へば、目前には、迂遠なるやうなれども、さきに行けば、成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にし



西郷隆盛筆蹟

て、己を盡し、人を咎めず、わが誠の足らざるを尋ぬべし。己を愛するは、善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の出来ぬも、過を改むることの出来

ぬも、功に伐りて、驕慢の生ずるも、皆、自ら愛するが爲なれば、決して、己を愛すまじきものなり。

過を改むるに、自ら、過てりと思ひつかば、それにてよし。その事をば棄てて顧みず、直に、一步踏みだすべし。過をくやくしく思ひ、取り繕はんとて心配するは、茶碗を割りたる時、その缺を集めて、合はせて見るとおなじことにて、詮なきことなり。

命もいらざ、名もいらざ、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならては、艱難を共にして、國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は、天下舉つて毀るとも、足らずとせず、天下舉つて譽むとも、足れりとせず。自ら信ずること篤きが故なり。(西郷隆盛)

二二、初度の歐洲行

文久年間、徳川幕府は、竹内下野守、松平石見守、京極能登守三人をば、特命全權公使に任じ、歐洲なる條約諸國に赴きて、聘問の禮を修めしめたり。余も、亦、幸にして、その員末に列することを得たるが、これ、實に、我等が、初度の歐洲行なりしなり。

竹内下野守  
名は保徳。  
松平石見守  
名は康直。  
京極能登守  
名は高明。  
條約諸國  
當時の條約國  
はアメリカ合  
衆國、ロシア、  
イギリス、フ  
ランス、オラ  
ンダの五國な  
りき。

一行の乗船は、特に、英國より派遣せられたる軍艦と定りけるが、英國公使よりは、屢使を以て、なるべく、一行の人数を減じ、その携帯の荷物をも節略せらるべし」と注意せられけり。されど、何事につけても、格式といふことやかましかりし、當時の事なれば、この注意は、なかなか採用せらるべくもあらず。非常なる減員をなしたりといふ一行は、なほ、三十人にあまれり。殊に、その荷物に至りては、將軍家より、各國の帝王、宰相に宛てられたる贈品、一行の携帯品等、積みて、山を成せり。また、その出發の支度につきては、全く、歐洲



1 福地源一 郎  
2 柴田貞太郎  
3 京極能登守  
4 竹内下野守  
5 松平石見守

の事情を知らざりし、當時のこととて、後日の笑話となれるもの少からず。

まづ、駕籠、持槍、甲冑、挾箱の類は、非常なる英斷にて、持參に及ばずと決したれど、尙、三使には、その用意なくてはとて、手槍、および、鞍、鐙の類をば

信玄  
武田氏。名は  
晴信。(一一八  
一年—一二三三  
三年)

持參せられたり。それより、筆墨紙はいふに及ばず、白米、醬油、香の物の類に至るまで、悉く、これを用意したり。さて、味噌は腐敗し易きものなれば、通常の品にては、物の用にも立つべからず、いかがすべきかとの事にて、評議まぢまぢなりけるが、我等は、切に、その、無用なるべきを説きたれど、勤向以外の儀に、さして口は、一切相成らずと、一言の下に叱り付けられたり。さては、いかに成り行くべきかと見てあれば、ある軍學者の説とかにて、甲斐の信玄が、軍用として傳へたる、萬年味噌の祕傳なりといふ法に従ひて、俄に製造せら

シンガポール

Singapore  
マライ半島の最南端にある一小島。

わらじ。  
(草鞋)

るる事となれり。かくて、それをば、瓶數箇に詰めて、持參したるが、笑止や、さすがの萬年味噌も、熱帯の温氣には敵し難く、香港とシンガポールとの間にて、早くも腐敗して、その異臭堪へ難く、遂に、空しく、海中に投げ棄てたりき。

次に、またをかしかりしは、草鞋の詮議なり。諸國遍歴の長途に、到る處、必ず、鐵道あり、馬車ありて、われ等の便に供せらるべしとは信じ難し。たとへば、山嶽、原野の崎嶇渺茫たる、車も通はざる如き境に至らば、いかにすべき。よしや、三使の乗馬のみは尋ね得とせん

マルセイユ  
リオン  
灣口にあ  
り。フラ  
ンス第一  
の重要  
港。

も、一行三十餘人の乗馬は、いかに西洋なればとて、到底、これを得べき道はあらざるべし。さる場合に當りて、第一に、無くて適はぬものは、履物の用意なり。假にも、西洋の靴など用ゐんは、この上もなき神州の恥辱なりとて、専ら、草鞋の用意に取りかかりけるが、これも、ある軍學者の説とかにて、甲州流の軍用茗荷草鞋といふものを、千足ばかり造られたり。固より、船中にては、その用なければとて、まづ、郵船に託して、佛國のマルセイユに廻送し置きたりけるが、到著の後、一足も用ゐずして、空しく、同所に留め置き、歸路に及びて、

品川沖  
東京灣内、品  
川町附近の沖  
合をいふ。

たがひに  
(互)

その取棄を、佛國の接待官に依頼して、別れたりき。かくて、一行は、文久元年十二月を以て、愈、品川沖より、英國の軍艦に乗り込みたり。英國軍艦にては、特別の注意を以て、一行を待遇し、頻に、その便利を圖りくられたれど、飲食より始めて、衣服、坐臥に至るまで、全く、その好尚を異にせるを、如何にかせん。艦長、士官等は、日本使節の、いかにも不作法にして、規律なきに困じて、その、少し、規律を守らんことを望み、一行は、また、艦長、士官等が、瑣細の事までの干渉を厭ひて、甚しき壓制なりと叫び、互に、その主張を固執して、彼我の意志、

スエズ  
埃及の都  
會。

るじ(笑)

更に疏通せざりければ、その間に立ちたる我等通辯、翻譯係のものは、唯、その奔命に疲るるのみなりき。さて、一行は、香港より、諸所に寄港し、スエズを過ぎ、まづ、佛國に著し、次いで、英國に渡り、かくて、順次、歐洲諸國を歴遊し、諸國の案内に應じて、歐洲文明の事物を觀盡したれども、一行中の二三人を除く外は、別に、益することなかりしが如し。汽車中の失敗、宴席上の疎忽、今より追想するも、ひとり打ち笑まるる事のみ多かり。(福地源一郎「懷往事談」)

二三、布哇小景

ホノルル  
布哇の首  
府。

エレベーター  
Elevator

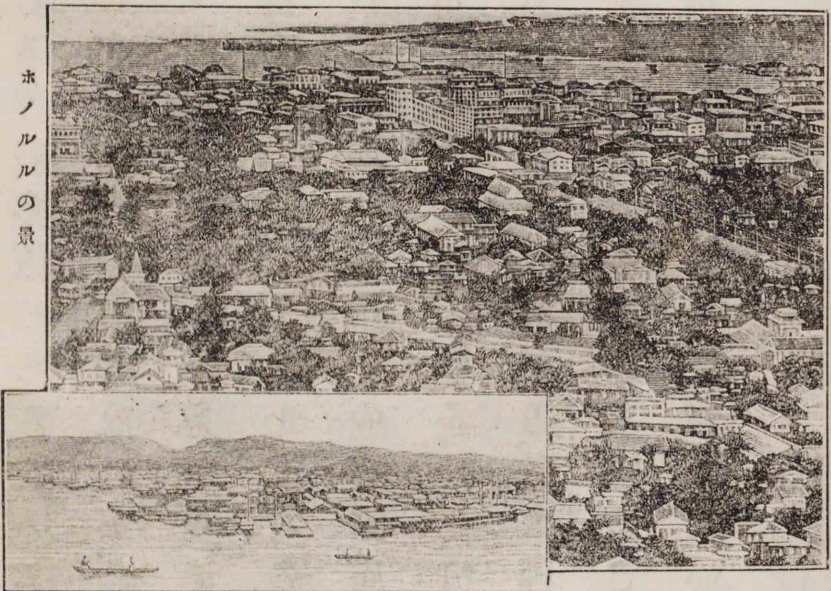
余が世界一週の間、ホノルルほど、氣持のよかつた處はない。それは、景色がよく、果物が澤山で、氣候がよい。なほ、その上に、他に多く、比類を見ない、愉快なことがあるからである。それは何かといふと、我が同胞の多いことである。ホノルルの一部には、立派な日本町が出来てゐる。自動車や、馬車が、日本人によつて取り扱はれてゐる。日本語で、萬事、用を辨ずることが出来る。歐米諸國、特に、米國の、高い家にエレベーターで昇降する、窮屈な生活から一轉して、氣樂なホノルル

据ゑる。

布哇  
Hawaii  
北太平洋  
中にある  
十餘の群  
島。

に入り、日本人の經營する旅館に導かれて、浴後、我が  
寛闊な浴衣のまま、廣い芝生の樹蔭に据ゑた安樂椅  
子に、體を横たへて、遠く海面を渡り來る微風に吹か  
れた時の味は、今以て、忘れることが出來ない。

布哇在留の日本人は、無慮八萬。實に、全人口の四割  
以上で、土人よりも、他の國人よりも、頭數においては  
最多である。随つて、又、子供も多い。公私立學校の生徒  
總數、二萬五千五百のうち、日本の子供は、七千以上に  
達してゐる。これらの子供は、すぐに、英語學校へ入ら  
うとしても、這入れないといふ事情から、豫備學校に



通ひ、また、故郷との音  
信の必要上などから、  
補習學校に通ふ者が  
多い。さうして、この種  
の學校は、皆、日本人の  
經營に屬して居て、な  
かなか盛である。聞け  
ば、布哇の英語學校の  
全數百五十餘に對し  
て、殆ど、三分の二を占

二三、布哇小景



むる程の多數であるといふ。

布哇には、鑛山はないが、砂糖は、非常によく出来る。米も出来る。砂糖作をやつてゐる日本人は、處處に村落を作つてゐる。しかし、その家屋は、概して布哇風で、日本風でない。布哇の通信局から出した報告書によると、人種一揆といふことは起らず、離婚も、よく行はれ、公立學校に於ける、各人種の子供の状態も良好で、一處に相親んでゐるとのことであるが、余も、實際に當つて見て、その誣言でないことを悟つた。

働いて、金を儲けることは、容易なところである。ホ

Dollar 弗

ノルルの一隅に、菊を作つてゐる日本人の家に立ち寄つて見たが、外人は、非常に、この花を喜んで、買ひに來てゐた。主人の話によると、日日、十弗や、二十弗の收入はあるといふこと。尤も、それは、菊の時節だけではあるが、日本で一日、二十圓から四五十圓の收入といふと、容易なことではない。(幣原坦―世界小觀)

二四、大海の日出

枕をうごかす濤聲に、夢を破られ、起つて、戸を開きぬ。時は、明治二十九年十一月四日の早曉、場所は、銚子

銚子  
下總國海上郡  
にして、利根  
川の河口に臨  
む。

の水明樓にして、樓下は、直に太平洋なり。

午前四時過にもやあらん、海上、尙ほの闇く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うたる方は、燻りたる樺色をなせるが、上の方は、次第に、濃きプルシヤンブルー色となり、ここに、一痕の弦月ありて、黄金の弓を挂く。その光さやかにして、さながら、東海を鎮するに似たり。左手に、黒くさし出でたるは、犬吠岬なり。岬端の燈臺には、廻轉燈ありて、陸より、海にかけ、連に、白光の環を忍がく。

暫する程に、長風冷冷として、海原をはらひ來り、夜

プルシヤン  
ブルー

Prussian-blue

犬吠岬  
銚子の東南約  
一里。

あをしろき  
(蒼白)

の衣は、東より、次第に剝げて、蒼白き曉の、波を踏みて、此方へ、此方へと近寄る状も指點すべく、磯の黒きに、濤白く打ちかかるさまも、漸く、明になり來りぬ。目をあぐれば、黄金の弓と見えし月も、何時しか白銀の弓とかはり、燻りて見えし雲も、次第に、澄みたる黄色を帯びぬ。森森たる海原に立つ波の、腹は黒く、背は蒼白く、夜の夢は、なほ、海の上にさまよへど、東の空、已に、瞼を開きて、太平洋の夜は、今明けなんとす。

已にして、曙光は、花の發くが如く、波紋の、圈を忍がくが如く、空に、水に擴りゆきて、水、いよいよ白く、東の

空、ますます黄ばみ、弦月も、燈光も、われと薄れゆきて、

果は、ありとも見え、ずなり

ぬ。偶、日の使とも覺しき渡

鳥の、一列、鳴きつれて、海原

を掠めて過ぐれば、大海の、

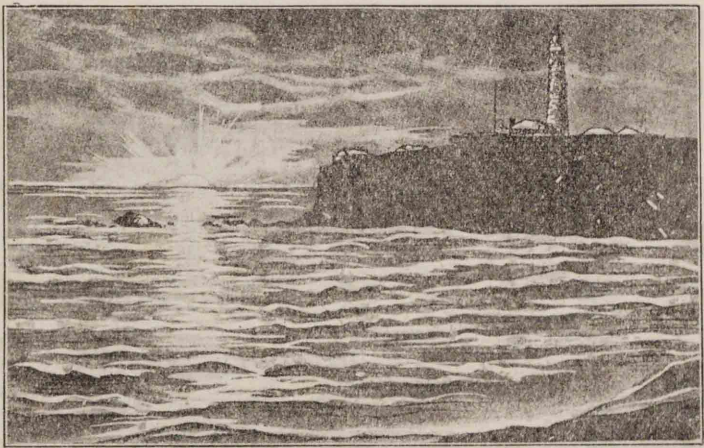
波といふ波は、盡く、東の方

を顧みつつさざめく。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東

の空、見る見る、金光さし來

り、忽然として、猩紅の一點、



鏡子海岸

海端に浮み出でぬ。すはや、日出でぬと思ふ間もなく、  
息をもつかせず、瞬く間もなく、海神が、手もて撃ぐる  
ままに、水を出づる紅點は、金線となり、黄金の櫛とな  
り、金蹄となり、一搖して、名残なく、水を離れつ。その時、  
萬斛の金、たらたらと、昇る日より滴りて、萬里一瞬、此  
方を指して、長蛇の如く、大洋を走ると思へば、眼下の  
磯に、忽焉として、二丈ばかり、黄金の雪を飛しぬ。(徳富

蘆花―自然と人生

二五、大海原 (坪内逍遙)

大いなるかな大海原。

朝に夕にどろどろと、

動き轟き夜もすがら、

大浪小浪寄せかへる。

いづこに打たぬ浪を見ん。

いつ浪の音を聞かざらん。

大いなるかな大海原。

世界の山山ことごとく、

崩すとも海は埋るまじ。

世界の川川絶間なく、

くづす(崩)

注げども海はとこしへに、

不増不減の瑠璃の色。

長閑きさまは海にあり。

風の凧ぎたる春の沖に、

朧にうつる月見れば、

荒ぶる心もなぎぬべし。

まつ島かげの朝ぼらけ、

蓬萊山もよそならず。

凄じさはた海にあり。

春秋二季の大あれに、

蓬萊山  
市海の中にあ  
りて神仙の住  
むさいふ山。

はやて起つて浪立てば、  
 甲鐵艦も木の葉と漂ひ、  
 おほ高潮の逆巻けば、  
 村村流れて迹もなし。  
 山はくづれ川は涸れ、  
 國興亡し人かはり、  
 陸には古今の別あれど、  
 うな原のみは開闢の、  
 神代のすがたそのままに、  
 動き轟き寄せかへる。

ゼウス  
 希臘諸神  
 の主宰  
 Zeus

二六、希臘神話

或時、ゼウスの金闕に至りて、世界の中心は、何處にか候はんと尋ねたる者ありき。ゼウス、思ふ所やありけん、應へて云ふやう。

「今より一年の後、重ねて來れ。われ、その處を示さん。かくいひおきて、さて、いと迅く翔る、二羽の鷺を取りて、同じ二人の僕を召し、

「汝等の中一人は、東の端、日輪の、波より昇る處に、この一羽の鷺を率て行け。今一人は、西の端なる荒海

の常闇にて、一物も見えぬ處まで、他の一羽を率て  
行け。かくて、合圖を爲さん。その時、一度に、鷲を放て  
と命令せり。

僕ども、仰のままに、鷲を率て、世界の極東と極西と  
に行きぬ。ゼウスはたと、手を拍てば、電迸り、雷轟き、二  
羽の鷲は、僕の手より放れて、一散に飛びぬ。一羽は、も  
と來し東をさし、一羽は同じく、西を指して、眞直に飛  
びぬ。弦を離れし強弩の矢と雖も、この疾さには及ば  
じとぞ見えける。

ゼウスを始め、山上の神神は、雲の中より、これを視

る。刻一刻、二つの鳥は、次第に近づきぬ。右にも、左にも、  
そるること無し。念一念、距離は、愈迫り來れり、發矢、海  
上の船の衝突する如く、中天に相打つて、共に、地に墜

ちぬ。

セ 誰ぞ、世界の中心を尋ね  
ウ しは、二羽の鷲の墜ちた  
ス る處、これぞ、即ち中心な  
る。



と、ゼウスは、高らかに叫びつ。その二つの鳥の墜ちて  
死したるは、希臘の一高山の頂なりければ、それより、

バルナッス  
 ス 希臘中部  
 ホシメ州  
 にあり。  
 高さ八千  
 六十尺。  
 アポロ  
 ゼウスの  
 子。希臘  
 神話中の  
 主なる  
 神。  
 Apollo

氣はひ

この山をバルナッスと名づく。アポロ、これを見て、彼の處、若し世界の中心ならば、我賜りて、長く、其處をば住居とせん。世界の國國より、我が光を望み得んやう、彼處に、館を造らんとて、ゼウスの許を請ひ、やがて、彼のバルナッスにぞ赴きける。

さて、礎を置くべき處ありやと視廻りゆくに、峯といふ峯は、荊棘生ひ蔓り、谷といふ谷は、陰闇くして、物の氣はひも無し。只、この山の麓に近き處に、巖の、二つに裂けたるかと思はるる絶壁あり。そこに、怖しき大蛇棲めり。この大蛇、屢里に出でて、家畜を奪ひ、時には、

携へ

男や、女や、小兒をとりて、己が洞穴に引き込みて、これを食ひぬ。



アポロ

アポロ、乃ち、銀の弓と箭とを携へて、彼の大蛇の棲める、絶壁の狭間をさして、分け行きぬ。大蛇の、草を倒し、岩を壊して、屢通ひたる迹あれば、まぎるる所なし。やがて、彼處に近づけば、大蛇は、忽ち、アポロを認め、徐に、身を起

して出で來りぬ。アポロ、少しも騒がず。足を止めて、大蛇を視るに、眼は、炬火の如く輝き、口は、血を塗れるかと疑はる。鐵の如き鱗に、岩石を磨りて動き來る音、怖しともいふばかり無し。アポロは弓に、箭を番へて、徐に、視を定む。兩兩、姑く睨み合ひたるが、大蛇は、敵の尋常ならざるを見て、漸く、恐をなし、首を廻して、逃れ去らんとす。その時早し、銀箭は、響をあげて、空を飛びぬ。大蛇は、一舉にして、殪されつ。

アポロ、此處に、館を造らんとて、臆て、礎を定む。程なく、彼の大蛇が棲處の迹なる、兩巖の間に、アポロの白

いしする。  
(礎)

き殿堂は、雲に聳えて建てられぬ。かくて、全く安全なる處となりければ、人人も、おひおひ來り集りて、各家宅をば建て列ねつ。かくて、アポロは、年長く、この館に住みて、人民を教へ導きければ、山も谷も日にけに開け行きて、美と光とに充ち満ちけり。

「いかで、この都に、名を賜らん。」

と、人人の請ひければ、アポロ點頭き、

「さらば、デルファイ」と呼ばん。我が母を背にして、海を渡りたるは海豚なれば。

といへり。(杉谷代水—希臘神話)

Delphi  
デルファイ



二七、佐久間大尉

猪突敵におもむくは易く、從容死に就くは難し。殊に、不慮の禍に遭ひて、毫も、狼狽することなく、應急の手段盡くるに至りて、自ら責任を重んじ、從容として、その職に殉せし佐久間大尉の最後のごときは、最も難しとする所なり。

明治四十三年四月十五日、吳鎮守府所轄、第六號潜水艇は、周防の國岩國新港の沖合、約一里の處にて、各種の演習に従事しけるが、機關に、故障をや生じけん、

佐久間大尉  
(二五三九年  
一、二五七〇  
年)

加へ。

俄然、海底に沈没して、その行方を失ひぬ。母艦、僚艦の乗組員は、大いに驚き、直に、百方、搜索を始め、また、無線電信にて、急を、鎮守府に報告せり。されば、府にては、即刻、軍艦豊橋に、派出救助の命を發し、なほ、驅逐艦および、水雷艇數隻をも加へて、遭難地に急行せしめたり。かくて、搜索の結果、翌十六日午後に至りて、漸く、その沈没の地點を發見したれば、直に、引揚に著手し、十七日の朝、辛うじて、その作業を終へ、艇内の排水と換氣とを行ひ、ここに、始めて、艦内を検するに、潜水後、すでに、數十時間を経過したることなれば、艇長佐久間

大尉は、腕を拱きたるまま、端坐して絶息し、部下の乗組員、將卒十一名の勇士、いづれも、或は仰臥し、或は安坐せるまま、勇敢なる死を遂げて、艇と、その運命を共にし、光景、頗る悲壯なり。



佐久間大尉肖像

その臨終の際、即ち艇の沈没後、午前十一時より、午後零時四十分までの間に、大尉の書きたる日記あり。その言言句句、至誠より出でたるものにあらざるはなし。その一節にいはいはく、

敬愛し、こころをこめて、  
遺骸、ここに葬らば、  
下士、之を誤り、  
テ、将来、潜水艇、  
ノ、発展、と、打撃、  
ヲ、受、ケ、ル、事、を、  
マ、ク、是、を、つ、し、  
メ、テ、是、を、  
知、り、以、テ、

佐久間大尉遺書

艇員一同、死に至るまで、皆よく、その職を守り、沈著に、事を處せり。われらは、國家のため、職に斃ると雖も、ただ遺憾とする所は、天下の士の、事實を誤解して、ために、將來、潜水艇の發展に、打撃を與ふるに至らざることなきかにあり。希はくは、諸君、益勉勵して、將來、潜水艇の發展研究に、全力を盡されんことを。

ひとへに  
(偏)

とて、部下の忠實職に殉する勇を賞し、一身の安危を忘れて、偏に、國家のために、潜水艇の將來を祈れり。さて、また、至尊に對し奉りては、罪を謝し、部下の遺族のことを思ひては、憐を乞ひてはいはく、

小官は、茲に、小官の不注意により、陛下の艇を沈め、部下を殺す大罪を謝す。仰ぎ願はくは、わが部下の遺族をして、窮するものなからしめ給はんことを。わが念頭に懸るもの、唯、これあるのみ。

最後に至り、海軍大臣以下、上長官に對して、最後の告別をなし、更に、その末に、

呼吸は、すでに、非常に困難なり。十二時四十分。

と附記せり。

嗚呼、これ、大尉が、死の、刻一刻に襲ひ來るに、從容自若として記したるものならずや。この遺文を讀むもの、誰か、その沈著に驚き、その悲惨に、涙を流さざるべき。何等の壯烈ぞ。

大尉、名は勉。若狹の國三方郡の人なり。沈勇を以て知らる。その小學、中學にある間は、修身、歴史に、最も、趣味を持ち、品行方正にして、友情に厚く、常に、讀書に耽りて、徒に時を費さず。海軍兵學校にある間は、幸便ご

その中學校  
若狭小濱中學  
校。

とに、海軍思想を、郷里の青年に普及せしめんことを  
圖り、遂に、その中學校に、海軍用ボートを造らしむる  
に至れり。常に、皇恩の忘るべからざるを唱へ、吉田松  
陰の士規七則を愛讀し、その句中の「斃而後已」の四字  
を、宮城二重橋を寫せる繪端書に書して、士官室に掲  
げ居たりとぞ。

第六號潜水艇の沈没したるは、もとより不測の變  
にして、必しも艇長の罪にあらず。されど、その責を負  
ひて、職に殉せし大尉は、實に、これ、義勇公に奉じたる  
ものにして、艇長たる者の龜鑑なるのみならず、わが

海軍の生命なり、日本武士の典型なり。あに偉ならず  
や。

二八、三英雄の死生觀

フレデリック  
ク  
プロシヤ  
の國王  
二二一  
七年一  
三三七  
年)  
ナポレオン  
二二四  
九年二  
四八八  
年)

フレデリック第一世は、戦線より、一兵卒の逃れ來  
るを見るや、その肩をつかんで、これを引きもどし、こ  
の卑怯者め。汝は、永遠に生きようと思ふかと、痛く罵  
り辱しめた。これと打つてかはつて、ナポレオンは、戦  
線から、一兵卒が逃げて來て、大木の背後に隠れたの  
を見るや、これと呼びよせていつた。戦友よ。汝は誤解

ウェリントン  
英國の將

してをる。死といふ者は、かくの如くにして避け得られる者でない。生死は運である。汝が死すべき運命を持つてゐるならば、樹のかげはおろか、地に深く、穴を掘つて潜んで居ても、銃丸は、かならず、汝を捜して殺さずには措かぬ。然るに、汝の運命が、若し生きてゐる筈のものであつたならば、陣頭に立つて、彈丸雨注の中に、身を暴すとも、銃丸は、皆、汝をよけて、左右へ飛んでしまふであらう」と慰めて、再び、戦線に還らしめたといふ。

然らば、ウェリントンは如何であつたか。ワートル

Wellington 軍(二四二九年) 一五二二年  
ワートルの大戰 西曆一八一五年六月十八日  
Weterloo 日。ワートルは、ベルギー國アラバント州にある。

ローの大戦闘に、ウェリントンは、一兵士の逃走するを引きとめて諭した。兵士よ。汝は勇士である。汝のその蒼白い顔色は、決死の相である。なぜ逃げる。余も、亦逃げたいには逃げたいが、職分といふ觀念、義務といふ觀念が、余をして、ここに止まらしめるのである。いざ還つて、一奮戦をやらうではないかと。

三將の死生觀は、躍如として、眼前に映ずること、眞に、活動寫眞を觀るやうである。第一は、死を、日常茶飯視してゐるのである。第二は、死生を、運命の神の掌中にある者と達觀してゐるのである。第三は、生死を、義

務、職分と觀じてゐるのである。ウェリントンWellingtonは倫理家であり、ナポレオンNapoleonは哲學者であり、而してフレデリックFrederickは純軍人であつた。(高橋五郎―人生哲學茶話)

二九、史傳を讀むべし

青年は、いかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見、左に申し述べ候。

人は、何人も、摸擬性と感染性とを有し居り候。而して、一生の中、この二性の、最も熾なるは、少年時代、若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸

擬性は、少年の方が強く、感染性は、青年の方が強く候。君子に接すれば、君子くんしに感染し、小人こじんに接すれば、小人こじんに感染し、豪傑ごうたつに接すれば、豪傑ごうたつに感染し、小才子せうさいしに接すれば、小才子せうさいしに感染するものに候へば、讀物の選擇も、これより割り出さざるべからずと存じ候。この類は、君子から小人に、豪傑から小才子に、それぞれに接すれば、その性質に感染するものなり。

この頃の青年の、一般の缺點は、歴史、傳記の知識に乏しき事に候。随つて、今の青年は、聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學者、大宗教家、忠臣、孝子などに接すること、極めて少く、随つて、自然、人物が小

くなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申し候。これ、實に、國家百年の大患に候。故に、小生は大呼す、請ふ大いに、史傳を讀まれよ」と。

又一つ、今の青年に通じたる缺點、これあり候。それは、箇人的、若しくは孤立的といふ點に候。即ち、前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考があまりに強く候。随つて、重厚雄大の氣風無くして、こせこせ、ちよこちよこする小人物が多く候。これも、史傳と親まぬよりおこることに候。史傳を讀めば、積善の家には、餘慶あり、積不善の家には、餘殃あ

おのれ

積善の家には云云  
易に出でたる語。

り」といふことが、よく解り申すべく、行が、自ら重厚になり申すべく、人物も、どつしりとして參り申すべく候。

申すまでも、これ無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く、人物の有無如何に、これあり候。盛なる國も、人物なければ、忽ち衰へ、振はざる國も、人物あれば、忽ち振ひ申し候。我が國、將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが、最大急務なりと確信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親みて、偉人に感染するに若く

消え。

は無しと存じ候。聖賢の遺著は、史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に、常に、座右に置き、日夕、絶えず讀誦なさるべく候。さらば、卑怯鄙吝の念、次第に消えて、心が、公明正大になり申すべく候。文學も、古きものは、精神の香たかく、人の心を淨化致し候へども、近時の文學は、動もすれば、人を誤るもの多ければ、その選擇には、深き注意を要すべく候。(天町桂月―新學生訓)

三〇、直江兼續

直江兼續

(一三三〇年

―一二二七九

年)

樋口次郎兼

光

木曾四天王の

一。兼遠の子。

壽永二年斬ら

る。(一八四

三年)

米澤

羽前國南置賜

郡。

五臣注の文

選

文選は梁の昭

明太子の撰し

たる詩文集に

して、三十卷

あり。兼續の

刊せし五臣注

は、この書を

唐の呂延濟、

劉良、張銑、

呂向、李周翰



直江兼續肖像

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳母子樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて、景勝に至る。景勝、奥州にて、百萬石を賜りたる時、米澤三十萬石を、直江に與へらる。陪臣の中第一の大祿なり。長高く、容儀骨がら、雙なく、辯舌さわやかに、殊に大膽なる人なり。且、文藝にも暗からず。五臣注の文選は、この人板行せさせたりとなり。詩をも作りて、



の五臣竝に李善の註したるもの。

春雁似吾吾似雁

洛陽城裏背花歸

伊達政宗  
仙臺の城主。  
二二二七年  
一三二九年  
年)

などいふ句も、世に聞えけり。伏見の城にて、諸大名い  
くらしも並み居たる時に、伊達政宗、懷中より、金錢取り  
出して、人人に見せられけり。金錢鑄造のこと珍しき  
頃とて、大いにもてはやさる。直江が、末座にゐたるに、  
「これ見られよ」とありければ、直江、扇のうへに、金錢を  
置きて打ち返し、女童の、羽つくやうにして、觀るを、政  
宗、いや苦しうも候はず。手に取られよ」といひも終ら  
ぬに、直江、謙信の時より、先陣の下知して、麾取りたる  
手に、かかる賤しき物とる時は、汚れ候ふ故、扇に載せ

たるにて候ふとて、政宗のかたへ投げ戻しけり。

上杉家に、三寶寺何某といふ者、下部の罪あるを誅  
したるに、その一族、大いに怒りて、死したる人を歸し  
給はれと、直江に訟へけり。直江、白銀二十枚を與へて、  
「後をとへ」と宥めけれども、いよいよ用ゐず。是非に歸  
し給はれ」と催促しけり。さまさまにいへども、とかく  
聞き入れず。その時、直江、然らば、訟の如くせん」とて、一  
族三人捕へさせ、地獄にゆきて迎へ來れ」とて、書簡一  
通封じて、使に往けとて、首を刎ねさせけり。その書簡  
に、しかじかの子細候うて、三人、迎に參らせ候ふ。とく

歸したまはり候へ。慶長二年二月七日、閻魔王冥官披露、直江山城守兼續とぞ書きにける。(常山紀談)

三一、運命その一

世の中の出来事の来りて、我等の運命を左右するもの、その數、日に百千なるのみならず。然れども、我等が、これを認め得るは、只、その表面に現れ、實際に、結果を生ずる一半のみ。その、來らんとして來らず、殆ど己の上に附著せんとして、遂に附著せず、そのままに消えゆく出来事は、また、實に夥しからん。もし、我等が、暗

David  
ダビッド

Boston  
ボストン  
米國マサ  
チューセ  
ツ州の  
首府。

暗裏なる、これらの出来事を認め得んには、我等の生涯の望と畏とは、まことに無限無邊ならん。ダビッドの事、以て見るべきなり。

我等は、ダビッドの既往を知らず。また、知るを要せず。彼の履歴は、小學校、および、中學校にて、一とほりの教育を受けたりといふのみにて、事足るべし。我等は、今、只、二十歳の少年が、始めて、故郷の田舎を離れ、ボストン府にゆきて、商家の手代とならんとする途上にある、彼を見るのみ。田舎少年の心安さは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出して、既に、日中に至れり。

おぼゆ

(覺)

時は、これ、夏のなかば、漸く覺ゆる疲勞と、益加る暑熱とは彼をして、かたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の來るを待ちて、これに投ぜんと決意せしめたり。

鬱葱たる幾株の喬木、丘の上に立ち並び、ほとりには、又、清らかなる泉の水の涌き出づるあり。たとひ、ダビッドならずとも、往來の人、誰か、この日中に、この樹蔭に遇ひて、一度憩ふことを懷はざらん。ダビッドは、まづ、泉の水に、渴きたる喉を潤し、徐に、負ひたる包を解きおろして、その上に、粗末なる木綿の手拭を重ねかけ、これを枕として、仰臥せり。太陽の光は、うちかさ

うまい

なれる枝に遮られて、ダビッドの身に至らず。往來の路は、昨日の大雨に潤ひたれば、少しも、塵を飛さず。生ひ茂れる緑の草は、絶好なる蓐よりも快く、柔なり。泉の水は沸沸として、常に、耳邊に鳴り、縦横せる枝は、そよ吹く風の爲に、をりをり微搖す。ダビッドは、忽ち、心陶然として、恍惚たるうちに、身はいつか、うまいの裏に落ちぬ。

ダビッドは、樹蔭に眠り居たるが、途上には、或は、馬に跨り、或は、車に乗り、また、或は歩みて、ダビッドの前を來往するもの點點たり。或者は、わき目もふらず過

ぎ行けば、彼の、此處にあることを知らざるなり。或者は、偶、彼の、ここに横たはれるに寓目すれども、おのが心の、忙しき思念に蔽はれて、別に、心も留めず過ぎ行くなり。又は、彼の、無邪氣に眠れるを見て、笑ひつつ去るもあり。又は、その、道傍に眠れるを卑みて、眉顰めつつ往くもあり。非難稱羨、一讚一譏、すべてダビッドに湊れり。

やがて、一輛の、はてやかなる輕車に、毛色うるはしき、一頭の馬を縻ぎ、鱗鱗として馳せ來れるが、この木立の前に至りて、突然とどまりたり。そは、一本の轄弛

繕ふ。

みて、一箇の輪に、くるひを生じたればなり。車中に見たりたるは、商人夫妻にて、齡高く、品よき人なり。老夫妻は、從者が、輪を繕ふ間、憩はんとて、樹蔭に立ち寄りたるが、その下に、ダビッドの横たはれるを見るより、俄に驚きて、二三步、あとにさがりたり。ためつ、すがめつ、しばし凝視し居たるが、やがて、心を安んじつらん、この、うまいせる少年を驚さざるやう、忍足して、再び、樹蔭に立ち寄りて、夫は、妻に低語せり、あの、心よげに眠れるさまを見よ、あの、呼吸する氣息の、極めて容與たるを見よ。これ、健康にして、心やすらかなる者ならで

Henry  
ヘンリー

は能はざるなり。もし、余をして、かかるうまいを得しめば、余は、わが歳入の半を割くとも惜しからじと。妻は、今、風の爲に、一方の枝の推しやられ、一條の太陽の光、少年の面に漏れそそぐを見て、自ら、手を伸べ、纏れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら、また、夫に低語せり、天は、この少年を、我等に與へ給ふと見ゆるなり。我等が、從弟の子の所行に失望せる後、偶然、この樹蔭に立ち寄りて、この少年に邂逅したるは、まことに不思議ならずや。且、熟視すれば、何となく、面ざし、逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に、彼を喚び醒さんか

と。夫はうち案じて、そは、何の爲ぞ。我等は、まだ、少年の素性をも知らずして」といへば、妻も、稍惑ひながら、尙も思ひ入りて、さりながら、かの、無邪氣なる容貌、かの、無心に眠れる姿よ」といひぬ。

今や、一箇の、莫大なる福は、ダビッドの上に臨めり。この老夫妻は、ただ一人の子ヘンリーを先立たせ、家に蓄へたる巨萬の富を、相續せさすべき者もなく、せめては、遠き從弟の子にと目ざして、これを尋ねけるに、その子は、所行不良にして、心に適はず、今、失望して、ポストン府に歸るなりけり。人は、かかる時に當りて、

さまさまの想像をも畫くものなり。妻は、再び反復せり、試に喚び醒さんか」と。同時に、背後に、從者の聲あり、「修繕整ひて候ふ」と。

老夫妻は、この聲に、忽焉として我に復り、相携へて、車上に、身を置けり。ダビッドは、なほ麴麴然たり。

三二、運 命その二

老夫妻を載せたる輕車は、去りて、まだ、一里は行かざるべしと思ふ時、また、二人の人ありて、この樹蔭に立ち寄りたり。木綿の頭巾を、目深に被りたれば、審に

見るべからざれども、顔の色、いたく黒くして、衣服粗野に、且、ここ、かしこに、幾多の汚點さへ印してあり。こはこれ、この邊を徘徊する山賊にして、今、その賊物を分たんとて、この樹蔭に來れるなり。かくて、ダビッドの横たはれるを見るより、一人は、早くも、他の一人に、「汝は、あの、枕にせる包を見ずや」と囁けば、されど、若し、目を覺したらば」といふを、一人は、急に、懷中を探りて、ヒ首の柄を、少し露して、これのみ」といふ。やがて、二人は、ダビッドのほとりに進み寄り、一人は、そのヒ首を抜きて、胸に擬し、一人は、頭の方にまはりて、その枕と

をさむ(藏)

Brandy  
ブランデー

せる包を抽かんとす。この二人の顔、若し、ダビッドをして、目を開きて見しめば、直に以て、悪魔とやなさん。この時、忽ち、一頭の黄犬あり、鼻をうごかして、頬に、地を嗅ぎつつ、ここに走せ來れり。一人の賊は、目早く、これを見つけていへり、やめよ、やめよ。かの犬の主人、次いで、ここに來るならんと。一人は、  
一人は、匕首を懷中に藏めたり。一人は、ブランデー一壺を取り出せり。仕事の將に成らんとして、敗れたるを笑ひののしり、互に、幾口かを飲むうちに、各、黒き顔に、一種の紅を潮し來れり。後には、ダビッドのこと

をば忘れて、がやがやとうち興じつつ、相携へて、また出でゆけり。しかも、ダビッドは、なほ齟齬然たり。

一時間の眠は、ダビッドの疲勞を醫し盡せり。ダビッドは、すこし身動せり。徐に、その唇を搖せり。聲はなけれど、口の中に、ひとり、半殘の夢を語れり。をちかたに起る輪聲、既にして殷殷、既にして轟轟、益近くして、益高く、今や、軋軋として、尺寸の間に来れり。これ、一輛の乗合馬車なり。ダビッドは、俄に躍り起てり。こや、御者。ここに、旅客あり。「上層に、席あり。ダビッドは、馬車の上層に、登り坐せり。ダビッドは、前途幾多の望をかけ

たる、樂しきボストン府に馳せ往けり、かの清泉には、  
一顧眄の別をだになさずして。

一度は富の神の來りて、黄金の光、その水面に照射  
せることもありしを、ダビッドは知らざるなり。又、一  
度は、死の神の來りて、その水上に血を染めんとせる  
こともありしを、ダビッドは知らざるなり。嗚呼、彼は、  
生涯、遂に、これを知らざるなり。(森田思軒)

三三、機智縦横

一、百人一首の對句

荻生徂徠  
儒者。江戸の  
人。(二三二六  
年—二三八八  
年)  
服部南郭  
京都の人。(二  
三四三年—二  
四一九年)

荻生徂徠、嘗て、小倉百人一首を検して、偶、その氏名  
と、歌中の一字とを連結したる、「大江千里月」の句を得  
たり。依つて、これが對句を求むれども得ず。偶、門人服  
部南郭來る。徂徠語るに、この事を以てす。南郭、卒然答  
へて曰はく、「春道列樹山とせばいか」と。徂徠、手を拍  
つて、妙と叫びぬ。

二、頼春水の羽織

頼春水  
儒者。安藝の  
人。(二四〇六  
年—二四七六  
年)  
菅茶山  
儒者。備後の  
人。(二四〇八  
年—二四八七  
年)

頼春水は、山陽の父にして、學問を以て著れたり。赤  
貧洗ふが如く、常に、白地の古羽織を著し、起居整然た  
り。或時、友人たる菅茶山、これに戯れて曰はく、「われ見



ても、久しくなりぬ古羽織と。春水、言下に答へて曰はく、君の袴は、幾代經ぬらんと。二人相見て、大いに笑ふ。

三、姨捨山の月

塙檢校保己一、或年、信濃路に入り、姨捨山の下を過ぐ。ここは、古來有名なる月の名所なり。人人、檢校の詠を看んことを乞ふ。檢校、聲に應じていはく、

わが心、なぐさめかねつ、更科や、

をばすて山に、てる月を見て。

と。人人、その古歌なることを訝る。檢校、手を振つて、否。終のて文字濁りて讀むべしといふに、人皆、その頓

塙檢校保己

一、國學者。武藏の人。二四〇六―二四八一年。

姨捨山

信濃國更級郡。

才に服す。

三四、京都の春

東寺の塔は、睦しく、我を迎へて立ち、鴨川の水は、なつかしく、我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ふに似たるは、いつも、京都に著きたる時の心地なり。

山紫に、水明なるところ、唯、夢の如く、現の如く、三條を渡り、四條を渡ること、日に幾たびぞ。躑躅を、柴に折り添へて、いただきつれたる大原女も、いつしか、わが友となれるが如し。如意が嶽より吹きくる春風は、輕

鴨川  
京都市を貫流す。

如意が嶽  
比叡の一支峰。俗に大の宇山といふ。

清水觀音  
清水寺の本尊  
千手觀音なり。

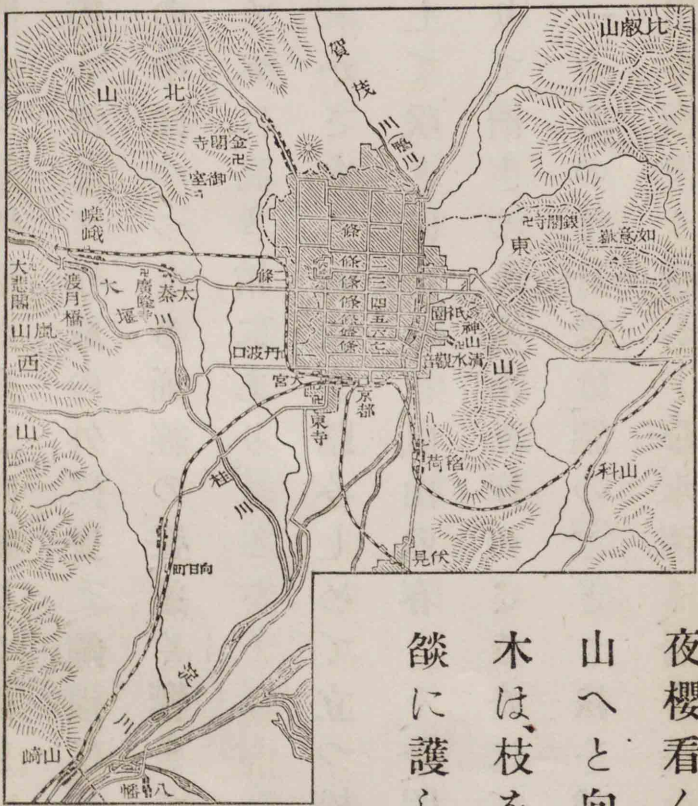
八幡  
山城國綴喜  
郡。  
山崎  
同國乙訓郡。

く、わが袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。  
類なき晴天に、心浮き立ちて、人は、西へ、東へと群れ  
行く。花に誘はれて、佛に詣で、佛に導かれて、花を看る  
客、けふも、清水觀音の堂前だうまへを充しつ。舞臺の上より見  
下す人、舞臺の下より咲き誇る花、恰も、一幅の畫の如  
し。姥は、この間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。しばし憩  
ひて、眺め渡せば、淺黄に、藍に、霞み渡れる八幡、山崎の  
邊も面白きに、東寺の塔を、松の間に墨がきなせる、筆  
の力こそ工なれ。

燈火の影は、水に映りて、星の如く、花の如し。祇園の

神山  
祇園の八阪神  
社の北。

ほのほ(燄)



の前後に、山彦を反し來れり。

夜櫻看んとする人は、神  
山へと向ふ。一もとの老  
木は、枝を垂れて、篝火の  
燄に護られ、寒からぬ雪  
は、雲なき空よ  
りこぼれて、顔  
を撲つ。田樂を  
賣る聲、茶を勸  
むる聲、この花

御室  
仁和寺をいふ。眞言宗。葛野郡花園村にあり。

うぐひす  
(鶯)

嵐山  
葛野郡松尾村にあり。

大堰川  
桂川の上流にして嵐山の麓を流る。

西山の花見る人は多く、まづ、御室を指す。松青く、樓門赤く、茶煙、絶え絶えに颺りて、花、きはめて白し。塔は、霞を洩れて、松風の外に聳え、鐘樓は、昔を説きて、香雲の中につつまる。誦經の聲、遠く響きて、鶯の歌、とこしなへに、高き梢にあり。

かさなる岩根を踏みしめて立つ松、その間を點綴して咲きほこる花、嵐山の春こそ、今、閑なれ。小舟に乗りて、漕ぎゆく人あり、岸のこなたにて、眺むる人あり。一すぢの渡月橋は、錦のごとき袂を載せて、この大堰川を横ぎり行かすむ。水清く、岩を洗ひて、玉と碎け、山

大悲閣

嵐山の山腹にあり。千手觀音を安置す。柳櫻をこま

ませて

古今集、素性法師、見渡せば柳櫻をこませて都ぞ春の錦なりける。

太秦

葛野郡。

廣隆寺

眞言宗。推古帝の朝、秦河勝建立。

叡山

比叡山の略。京都の東北に峙つ。

しらく、塵を離れて、空にかがよふところ、この美は、かの美と相映じて、自然の彩色をなす。阪を登りて、大悲閣に至れば、眼下に展げられたる一幅の圖、柳櫻をこませて、恰も、西陣を織りいだせるが如く、又、友禪を染めなせるが如し。

途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽、靜に、鐘樓の瓦を染めて、春もの寂し。茶店あれども、客來らず。老嫗は、落花を、風に任せて睡り、兒童は、仁王尊に紙礫を打ち著けて去る。

暮色は、東山を籠め、叡山をめぐり、やうやう、鴨川に

あはし(淡)

襲ひ來れり。人影黒く、燈影淡く、天地、ただ平和にして、  
四顧、ただ寂寞たり。かへりみれば、西山もなく、また、北  
山もあらず。(天和田建樹―雪月花による)

三五、杉の戸

清水濱臣

春もたものばハ、すぢみ戸を、  
おしあけ方に、見わたせば、  
軒端の雲は、さくらみそ、  
そぼろ雨こそ、香にまほし。

かゝる(薫)

雲間の月も、やどるなり、  
とひなの聲も、―まろたを、  
たちぞなきさ、ゆふ風に、  
山もろ―づ、さず―て、  
あきふく風の、ばせを葉に、  
ふるこゑも聲、ねとづきて、  
まどより西に、月うげの、  
かゝる見こそ、あをれたま。

なりはひ。

冬でもりせむ、雪のねに、

福のうづも火、かきおこし、

岩やくしづぐ、なりそひを、

思慮むいそそ、身は冷ゆき。

三六、時

ナポレオンは、最もよく、時間の大切なことを知つた人であつた。時間の使用が、巧妙をきはめたからこそ、あのやうな、比類ない大功を奏したのである。嘗て、

オーストリ

ヤ

Austria

嗤つて  
(嗤ひて)

グルーシー

Grouchy  
二四二  
六年一  
五〇七  
年

オーストリヤ軍の敗北を嗤つて、彼等は、五分時間の價値が幾何なるかを知らない爲に敗れたのである。といつた。この時間の英雄ナポレオンが、ワーテルロ一の戦で、一敗地に塗れたのも、みづから、時を誤つたと、部將グルーシーが遅参したとの爲である。

成功の秘訣を教へた名言に、「思ひ立つ日が吉日」といふのがある。思ひ立つや否や、即時に、その事に著手すると、興味が涌くやうで、わが身が、勤勞に従事してゐるのも忘れてしまふ。随つて、自ら、事業も、速に進捗するものである。もし、思ひ立つた日に始めないと、當

Heraklitos  
ギリシヤの哲學者。初めて萬物循環論を唱ふ。

時の興味は、索然として消え失せ、他日、これを始めるに、非常の困難と痛苦とを感ずるばかりでなく、成功の一段になつても、即時に著手したのに劣ることを免れない。それで、或大商店では、規則を設けて、書状は即日返答すべしと定めたといふ。事をなすのは、種子を蒔くものが、一度、季節を失ふと、遂に、蒔くことが、出來ないやうなものである。汝は、同じ河水で、再び沐浴することは出來ぬといふ、ヘラクリトスの言は、河水は流れて息まず、時は往いて還らず、大事も、興味も、元氣も、熱心も、一度去つては、再び得られないことを謂

明日ありと云云  
古歌に、「明日ありと思ふ心のあだざくら夜半に嵐の吹かぬものは。」

つたものである。

何事でも、なさねばならぬことは、直に爲すに限る。世の失敗者の多くは、明日ありと思ふ心のあだ櫻を、夜半の嵐に吹き散されて、茫然自失した者である。事は、時機を失つてならぬこと、なほ、鐵は、その紅いうちに打ち、枯草は、太陽の輝いて居る間に乾さねばならぬやうなものである。古來、偉人と呼ばれ、豪傑と稱せられた人は、大抵、皆、分陰を惜み、機會を捉へた人である。

時を誤るものは、責任を誤るもので、斷じて、世間の

フランクリン

米人。電氣學の祖と稱せらる。二二三年六月一日二四五〇

Franklin

二二三年六月一日二四五〇

ネルソン

Nelson

イギリスの海軍提督。トラファルガーに、フランスの艦隊を破りて戦死す。二四一年一八年二四六二年

信用を受くることはない。ワシントンは、一日、その書記が遅刻して、時計が遅れたから」と辯疏するのを聞いて、それでは、直に、正確な時計を買へ。さうでない、私は、他の書記を備ふから」といひ、フランクリンは、常に遅刻勝の奴僕を嗤つて、善く辯解する人は、何の役にも立たぬ人だ」といひ、ネルソンが、或時、軍艦に乗らうとする前夜、御者が、明朝正六時に、馬車をまはしませう」といふと、ネルソンは、それより、十五分前に來よ。一定の時より、十五分前にあるのは、余が余たる所以である」といつた。ナポレオン、一夕、諸將を、晚餐に招い

たが、時刻になつても、諸將が來なかつたので、ナポレオンは、一人で、食事を始め、方に、食卓を離れようとする頃、諸將が、漸く來たのを見て、諸君、食事の時間は、既に過ぎた。さあ、各自の職務に服しよう」といつた。時間を、大切に守るは、責任を盡し、義務を重んずる所以で、身を立つる基である。(立身策による)

三七、安宅

時しも頃は春のはじめ、風まだ寒き北國路を、いたはしや義経は、兄頼朝の疑をうけ、奥州さして落ちて

春のはじめ  
文治三年二月  
義経  
時に二十九  
歳。(一八一九  
年一八四九  
年)

辨慶  
武藏坊と號  
す。一八四  
九年）  
安宅

加賀國能美郡  
にあり。但當  
時の關の址  
は、今、海中に  
陥りたりとい  
ふ。

行く、主從僅に十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身を褻し、日數程經て加賀の國、安宅の港に著きにけり。

義「いかに辨慶。旅人等の尊によれば、安宅には特に、關を設けて、山伏を、きびしく取り調ぶる由、如何にすべきぞ。」

辨「これは、ゆゆしき御大事なり。きつと、これにて、御工夫あるべし。」

人人「いやいや、何程の事かあらん。ただ打ち破つて、御とほりあるべし。」

辨「いやいや、打ち破らんは易けれども、大事の前の

小事なれば、成るべく穩なる手段を取りたし。

義「然らば辨慶、ともかくも、その方の工夫に任せん。よろしく計らひくれよ。」

辨「畏つて候ふ。まづ考へ出したることは、我等、かく、山伏に、身をやつせども、包みがたきはわが君の御品格なり。畏ながら、暫く、強力に、御身をやつされ、御笠、深く召され、我等の笈を負ひて、わざと、後にさがつて、御とほりあれかし。さなくば、忽に見出され候はん。」

義「げにげに、これは尤の事なり。」



姿をやつし主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば關の役人富樫左衛門、  
 富「やあやあ山伏。關なるぞ。名をなのれ。」  
 とぞ呼びける。

辨「承つて候ふ。これは、奈良東大寺建立の爲に、北陸道を勸進する山伏にて候ふ。」

富「それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、この關は通しがたし。」

辨「して、そのいはれは。」

富「さればなり。頼朝、義經、御不和により、義經殿には、

東大寺建立  
 治承四年、平  
 重衡に焼かれ  
 し故の再建な  
 り。



能の安宅

山伏と、姿をかへて、奥州へ落ちらるる由。故に、諸國に、新關を設けて、山伏を、かたく止むるなり。一人も通しがたし。

辨「承つて候ふ。しかし、贗山伏をこそ止めらるべけれ、まことの山伏を止め給ふ要は候はじ。」

富「あらむづかし。論より證

據なり。まこと、東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ、ここにて、それを讀み上げられよ。某、これにて聽聞せん。

辨「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候ふ。」

もとより、勸進帳のあらばこそ、笈の中よりあり合はせの、卷物一つ取り出し、勸進帳と名づけつつ、即智を以て文を綴り、まことしやかに聲高高と、天も響けと讀み上げけり。富樫つくづく聞きすまし、

富「最早、疑は晴れて候ふ。御通り候へ。」

辨「かたじけなく候ふ。」

げにや、紅は、園生に植ゑてもまぎれなし。後に隨ふ強力を、富樫目早く見とがめて、

富「いや、暫く。その強力は通し難し。とどまれ。」

と罵りぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちどまる。辨慶騒がずそらとぼけ、

辨「やい、強力め。何とて、早く通らぬぞ。」

富「いや、それは、こなたより止めたるなり。」

辨「そは、また何故。」

富「あの強力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。」

辨「奇怪千萬。義經殿に似たりとや。しかいはるる強

力めは、一生の名譽ならんが、さりとしては、腹立たしや。けふのうちに、能登境まで行かんと思へばこそ、強力やとひたるに、僅の笈を重げに負ひて、人人に後るればこそ、貴人かとも怪まるれ。憎さも憎し。いで、懲してくれん。

金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す。

すうる(据)

これはと驚く人人を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打ち据りる。富樫やうやく疑念を釋き、

富「これは、我等が誤なり。その強力には、構なし。とくとく、一同、御とほりあれ。」

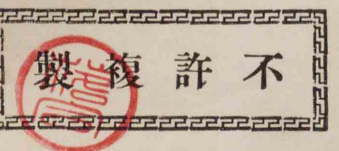
いふに人人ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばさらばと立ちあがり、關路をあとにしづしづと、奥州さして下りけり。(坪内逍遙)

新定中等國語讀本卷二終

大正十年十二月六日  
 大正十一年二月三日  
 大正十二年九月十日  
 大正十三年十一月十七日  
 大正十四年一月十三日  
 大正十五年三月十七日  
 校訂再版發行  
 校訂再版發行  
 校訂再版發行  
 校訂再版發行  
 校訂再版發行  
 校訂再版發行

新定中等國語讀本

定價		臨時定價	
卷一、二各金四拾錢	卷三、四各金參拾九錢	卷一、二各金七拾貳錢	卷三、四各金七拾錢
卷五、六各金參拾壹錢	卷七、八各金七拾錢	卷九、十各金五拾六錢	卷十一、十二各金五拾六錢



著者 故落合直文  
 相續者 落合直幸  
 補修者 萩野由之  
 補修者 森林太郎  
 發行者 株式會社明治書院  
 印刷者 株式會社明治書院

大正十年八月二十日  
 教育部省檢定濟  
 中國國語學校  
 用科語

發行所

東京市神田區錦町一丁目  
 振替貯金口座東京四九九一番

株式會社

明治書院

電話大手五八四五・六八六九番

